

ワーニヤ伯父さん

ДЯДЯ ВАНЯ

——田園生活の情景 四幕——

青空文庫

人物

セレブリャコーフ（アレクサンドル・ヴラジーミロヴィチ） 退職の大学教授

エレーナ（アンドレーヴナ） その妻、二十七歳

ソーニャ（ソフィヤ・アレクサンドロヴナ） 先妻の娘

ヴォイニーツカヤ夫人（マリヤ・ワシーリエヴナ） 三等官の未亡人、先妻の母

ワーニャ伯父さん（イワン・ペトロヴィチ・ヴォイニーツキイ） その息子

アーストロフ（ミハイル・リヴォーヴィチ） 医師

テレーギン（イリヤ・イリイチ） 落ちぶれた地主

マリーナ 年寄りの乳母

下男

セレブリャコーフの田舎屋敷での出来事

第一幕

庭。ベランダのついた家の一部が見える。並木道のポプラの老樹の下に、テーブルがあつて、お茶の支度ができている。ベンチ、椅子、それぞれ数脚。ベンチの一つに、ギターが載っている。テーブルのじきそばに、ブランコがさがっている。午後二時すぎ。

曇り日。

マリーナ（ぶよぶよした、動きの少ない老婆ろうば）が、サモワールの前に坐すわつて靴下を編んでいる。アーストロフが、そばを歩き回っている。

マリーナ（コップに茶をつぐ）お一ついかが、旦那だんな。

アーストロフ（気乗りのしない様子で、コップを受ける）あんまり欲しくもないがね。

マリーナ ウオトカならあがるんでしょう。

アーストロフ いいや、ウオトカも毎日はやらない。それに、今日は蒸し蒸しするしな。

(間) ねえ、ばあやさん。あんたと知り合いになつてから、どれくらいになるかなあ。

マリーナ (考えながら) どれくらい? そうですね。……あんたが、この土地においてたのは……あれは、いつだったか……まだソーニヤちゃんのお母御の、ヴェーラ様がご存命の頃でしたわねえ。あの方がおいでの時分、あんたは、ふた冬ここへ、かよつて見えましたよ。……すると、かれこれも、十一年になるわけですねえ、(思案して) それとも、もつとになるかしら。

アーストロフ その時分から見ると、わたしも随分かわつたらうねえ。

マリーナ ええ、随分。あのころは、お若かつたし、おきれいでもあんなすつたけれど、今じゃもう、だいぶおふけになりましたよ。男前も、昔のようじゃないしねえ。なにしろ——ウオトカをあがるからねえ。

アーストロフ そう。……この十年のまに、すっかり人間が變つてしまつたよ。それもそのはずさ。働きすぎたからなあ、ばあやさん。朝から晩まで、のべつ立ちどおしで、休むまもありやしない。晩は晩で、^{ケット}毛布のしたにちぢこまつて、今にも患者から呼び出しが来やしまいかと、びくびくしている始末だ。この十年のあいだ、わたしは一日いちんちだつ

て、のんびりした日はなかった。これじゃ、ふけずにいろというほうが、よっぽど無理だよ。おまけにさ、毎日々々の暮しが、退屈で、ばかばかしくて、鼻もちがならないときている。……ずるずると、泥沼へ引きずりこまれるみたいなものさ。ぐるりにいる連中ときたら、どいつもこいつも、みんな妙ちきりんなデクの坊ばかりだ。ああした連中と、二年三年と付き合ってみるがいい。知らないうちに段々、こっちまでが妙ちきりんな人間になってしまう。これは所詮しょせん、どうにもならない運命だよ。（長い口髭くちひげをひねりながら）いやはや、この髭も、どえらく伸びたもんじゃないか。……ばかげた髭さね。もつとも私は、妙でけれんな男になりはしたものの……ばかになつたかというところ、まだ必ずしもそうじゃない。ありがたいことに、脳みそだけは、まだちゃんとしている。人間らしい感じのほうは、どうやら、だいぶ鈍つてきたようだがね。なんにも欲しくない、なんにも要いらない、誰たれといって好きな人もない。……ただしね、あんなだけは好きだよ（乳母の額にキスする）。わたしも子供のころ、ちようどあんなみたいな乳母がいたつけ。

マリーナ 何かめしあがりませんか。

アーストロフ いいや、欲しくない。この春の初め、伝染病のはやっている、なんとかい

う村へ行つたことがあつたつけが。……発疹はっしんチフスというやつでね。……百姓家は、軒なみに、病人がごろごろしているんだ。……いやその不潔なこと、臭いこと、煙たいこと。ゆかべたには仔牛こうしが、病人と同居しているし……仔豚までそのへんを、うろうろしている始末なのさ。……そこでまる一日いちにち、あくせく働いて、ちよいと一服するまもないし、これっぽっちの物を、口へ入れる暇もなかった。やっとこさで、家うちへ帰つてみると、やつぱり休ましちやもらえない。——鉄道から、線路工夫を一人かつぎこんで来てね、手術をしてやろうと、そいつを台の上へ寝かしたら、やつこさん、クロロホルムにかかったなり、ころりと死んじまつたじやないか。ところが、よけいな時に人間らしい感情が、ここんところで（胸をおさえて）目をさましてね、まるでその男を、わざと殺してもしたみたいに、気が咎とがめるんだ。……そこで私は坐すわりこんで、こう目をつぶつて——こんなことを考えたよ。百年、二百年あとから、この世に生れてくる人たちは、今こうして、せつせと開拓者の仕事をしているわれわれのことを、ありがたいたいと思つてくれるだろうか、とね。ねえ、ばあやさん。そんなこと、思つちやくれまいねえ。

マリーナ たとえ人間は忘れても、神さまは覚えていてくださいますよ。

アーストロフ ああそうか、ありがとうよ。いいことを言つてくれたね。

ワーニャ登場。

ワーニャ（家から出てくる。おそい朝飯のあとで一寝入りして、だらけた様子をしている。ベンチに腰をおろして、伊達^{だて}なネクタイを直す）そう……（間）。ふむ、そう……アーストロフ よく寝たかい？

ワーニャ ああ。……ぐつすり（あくびをする）。なにしろ、教授ご夫妻がやってきてからというもの、生活がすっかり脱線しちまったよ。……妙な時間に眠ったり、朝飯や昼飯に何やらエタイの知れないものを食わされたり、酒を飲んだり……すること^な為すこと、どうも不健康なことばかりだ。これまでは、暇な時間なんかちつともなくって、僕もソーニャも、感心なほどよく働いたものだ。ところが今じゃ、働くのはソーニャだけで、僕は寝る、食う、飲む。……さつぱりいかん。

マリーナ（頭を振って）すっかり、きまりが変りましたよ。先生さんのお目ざめは十二時なのに、サモワールは朝からシユンシユン沸いて、お出ましを待っているんですからねえ。あのご夫婦が見えない時分は、おひるは世間なみに、いつも一時前でしたのに、

今じや六時を過ぎる始末ですよ。よる夜なか、先生さんは本を読んだり物を書いたりなさるもので、突拍子もない二時ごろに、いきなりベルが鳴りだす騒ぎ。……なにご用で、旦那さま？ お茶だ！ と、こうですよ。そこで下の者を起して、サモワールの支度。まったく、結構なきまりになったものですよ。

アーストロフ まだ当分、ここに居るつもりなのかね。

ワーニヤ (ヒューと口笛を吹いて) 百年ぐらいね。やつこさん、ここに居坐る肚はらなのさ。マリーナ 現に今だつても、サモワールはもう二時間もこうしてあるのに、皆さん散歩にお出かけですよ。

ワーニヤ やあ、来た来た。……心配無用だ。

話し声がかきこえて、庭の奥から、散歩帰りのセレブリヤコーフ、エレーナ、ソーニヤ、テレーギンが出る。

セレブリヤコーフ じつにいい、じつにいい。……まさに絶景だ。

テレーギン すばらしい眺めですよ、御前さま。

ソーニャ あしたは、森の番小屋のほうへ行ってみましょうね、お父さま。いいでしょう？

ワーニャ 皆さん、お茶ですよ。

セレブリヤコフ いや済まないが、お茶はわたしの書齋へ持ってきてくださらんか。今日はまだ、二つ三つ仕事があるから。

ソーニャ あのへんの眺めも、きつとお気に召しましてよ。……

エレーナ、セレブリヤコフ、ソーニャ、家へはいる。テレーギンはテーブルに近づき、乳母の傍に坐る。

ワーニャ こんなに蒸暑い日だというのに、わが大先生は外套がいとうを召して、オーバシユーズをはいて、コウモリを持って、手袋まではめてござる。

アーストロフ つまり、健康に注意しているというわけだ。

ワーニャ だがあの人は、なんて美人だろう。すばらしい美人だ。生れてこのかた、僕はあれほどの器量の人に会ったことがない。

テレーギン　ねえ、マリーナさん。わたしは野原へ出てみても、こんもり茂った庭を歩いても、このテールブルを眺めても、言うに言われぬ仕合せな気持がしますよ。うっとりするようなお天気だし、小鳥はさええずつてるし、みんなはこうして、仲よく平和に暮してるし、——この上なんの文句がありませんよう。（コップを受けながら）ありがとう、ご馳走になります。

ワーニヤ　（夢みるように）あの目つき。……なんとも言えない女だ。

アーストロフ　何かいい話はないかい、ええ、ワーニヤ君。

ワーニヤ　（だるそうに）いい話つて？

アーストロフ　何か、耳新しいことでも。

ワーニヤ　ないね。旧態依然たりき。僕なんざ、相も変らぬ元の奎阿弥もくあみだよ。いや、ひよつとすると、かえつて悪くなつてるかもしれない。なにしろ怠け癖がついちまって、さっぱり仕事もせず、もうろく親爺おやじみたいに、ぼそぼそ言つてるだけだからなあ。お次に、うちの老いぼれ婆さんばあ——つまり、お袋さんときたら、十年一日、明けても暮れても婦人解放論あけぼのき。片足は棺桶かんおけへ突つこんでるくせに、のこる片つぽの足じゃ、新しい生活の曙あけぼのをめざして、むずかしい本のページを、せつせとほつつき回つてるんだ。

アーストロフ 教授閣下は？

ワーニャ ああ、大先生か。やつこさんは、相変らず朝から夜中まで書齋にとじこもつて、何やら書いてござる。

眉まゆに皺しわよせ知恵をしぼつて、

朝から晩まで歌を書く、歌を書く。

されど、この身も、わが歌も、

褒ほめられたこと 絶えてなし。

つてなわけさ。がりがり書かれる紙こそ、いい面つらの皮だよ。いっそのこと、自叙伝でも書いたほうが、よっほどましだろうにね。こいつはまったく、すばらしい題材だいざいだぜ。停と年でやめた大学教授でさ、いいかい、カサカサの乾パンでさ、おまけに学のある棒鱈ぼうだらときている。……しかも痛風やみで、リョーマチで、頭痛もちで、その上やつかみと焼もちとで、肝臓肥大症ときている。……その棒鱈がさ、死んだ、前の細君の地所へ、しぶぶながら転ころがりこんで来た。それというのも、都会ぐらしが、ふところに合わないからさ。やつこさん、自分ほど恵まれない不遇な男はないと、年じゆうこぼしてばかりいるが、じつのところは、あれほど運のいい男は、まあ滅多にないね。(いらいらした

調子で) ほんとだよ。なんて運のいい奴だ！ たかが寺男の俵がさ、官費で勉強させてもらって、まんまと博士号だの教授の椅子だのにありついてさ、やがて親任官に成りあがつた挙句に、枢密院議員のむこさんに納まった、等々といった次第だからなあ。いや、まあ、そんなことはどうだっていい。考えなくちゃならないのは、次の点だ。それはね、まる二十五年のあいだ、やれ芸術だの、やれ文学だのと、書いたり説教したりしてきた男が、そのじつ文学も芸術も、からつきしわかっちゃいないという事実だ。やつこさん二十五年のあいだ、やれリアリズムだ、やれナチュラリズムだ、やれくしやくしやイズムだと、人様の考えを売りに来ただけの話さ。二十五年のあいだ、あいつが喋つたり書いたりして来たことは、利口な人間にはどうの昔からわかりきったこと、ばかな人間にはクソ面白くもないことなんで、つまり二十五年という月日は、夢幻抱沫ほうまつに等しかったわけなのさ。だのに、やつうぬぼの自惚れようはどうだい。あの思いあがりようはどうだい。こんど停年でやめてみれば、あいつのことなんか、世間じや誰ひとり覚えちやいない。名もなにもありやしない。つまりさ、二十五年のあいだ、まんまと人さまの椅子いすに坐っていたわけだ。ところが見たまえ、あいつはまるで、生神さまみたいに、そっくり返つていやがる。

アーストロフ いやどうも、君はやつかんでるね。

ワーニャ ああ、やつかんでもとも。それでいて、あいつの女運のいいことはどうだ。いかなドン・ファンだつて、あいつほどの女運には恵まれなかったものなあ。あいつの先妻だった僕の妹は、おとなしい、すばらしい女で、まるであの青空のように清らかで、気高くつて、大らかで、あいつの弟子どもよかもつと沢山、崇拜者があつたものだ。しかも、まるで天使のような美しい清らかな愛を、あの男にささげていたものだ。あいつの姑さんしゅうと、つまり僕のお袋は、いまだにあいつを崇拜している。つまり、あいつめ、こわもてしているというわけだ。おまけに、あいつの後妻ときたら、君も今さつきごろんのとおりの、才色兼備の女性だが、その女までが、すでに老境に入ったあいつの嫁になつて、あつたら若さと、美貌びぼうと、自由と、輝きを、ささげてしまったのだ。妙な話さ。さつぱりわからん。

アーストロフ あのひとの身持ちはいいのかね。

ワーニャ 残念ながら、さよう。

アーストロフ なぜ残念なんだい。

ワーニャ なぜつて、あの女の身持ちたるや、徹頭徹尾うそつぱちだからさ。うわべばか

り飾り立てて、さっぱり筋が通つちやいない。厭いやで厭いやでならない老おいぼれ亭主だが、さりとて浮気するのも女の道にはずれる。そのくせ、みじめな我が身の若さと、生きた感情を殺すことは、決して不道德じやない。

テレーギン（泣き声で）ワーニヤ、それを言わないでくれよ。頼むよ、ほんとに。：
 …現在の妻なり夫なりに背そむくのは、つまり不実な人間で、やがては国に叛そむくことにも、なりかねないんだよ。

ワーニヤ（腹だたしげに）口をしめろ、ワツフル。

テレーギン まあ、お聞きよ、ワーニヤ。わたしの女房は、このわたしの男つぷりに愛想をつかして、婚礼のあくる日、好きな男と駆落ちしてしまった。けれどわたしは、その後ごも自分の本分に、そむいたことはないよ。今になるまでわたしは、あれが好きだし、実をつくしてもいるし、できるだけは援助もしてやっている。あれと好きな男のあいだにできた娘の養育費に、わたしは財産を投げ出してしまったんだよ。そのため、わたしは不仕合せにやなつたが、気位だけは、ちゃんとなくさずにいる。ところが、あの女はどうだ。若さとも、おさらばだ。人間のご多分にもれず、器量も落ちてしまう。好きな男には、死なれてしまう。……いったい何が残つたらうね。

ソーニャとエレーナ登場。しばらく暫くしてヴオイニーツカヤ夫人、本を手にして登場し、腰をおろして読む。乳母が茶をすすめると、見もしないで飲む。

ソーニャ（気ぜわしく乳母に向つて）ばあや、百姓たちが来てるのよ。行って、話をしておくれな。お茶は、あたしがするから……（茶をつぐ）

乳母退場。エレーナはコップを取り、ブランコに腰かけて飲む。

アーストロフ（エレーナに）わたしは、ご主人の診察に伺ったのです。あなたのお手紙によると、ご主人はリョーマチやら何やらで、大そう具合がお悪いとのことでしたが、案外びんびんしておられるじやありませんか。

エレーナ 昨晩はだいぶ、むずかりましてね。脚が痛むと言っておりましたが、今日はおうけろりとして……

アーストロフ ところがわたしは、取るものも取りあえず、八里の道を飛ばして来たので

す。いやなに、かまいません。何もこれが最初の経験というわけでもないですからね。その代り今夜は、お宅に泊めて頂いて、せめても思う存分、眠らせて頂くとしましょう。ソーニャ そうなさるといいわ。お泊りになるなんて、滅多にないことですもの。おひる、まだなんでしょう。

アーストロフ ええ、じつはまだなんです。

ソーニャ ちょうどいいわ、召し上がってくださいましね。うちではこの頃、お昼は六時すぎなんですのよ。（お茶を飲んで）まあ、冷たいお茶！

テレーギン サモワールの温度は、非常に低下しております。

エレーナ 結構よ、イワン・イワーヌイチ、冷たくても頂きましょうよ。

テレーギン 失礼ですが……。わたくしは、イワン・イワーヌイチじゃなくて……。イリヤ

・イリイチと申しますんで。……。イリヤ・イリイチ・テレーギン、一名、ワツフル

と申しますのは、このとおりのあばた面だもので、口の悪い人がつけた仇名あだななのでござ

います。わたくしは、その昔、そのソーニャちゃんの名付親になったことがありますし、

ご主人の教授閣下にも、かねがねご昵懇じっこんに願っております。目下のところ、このお屋

敷内にご厄介やっかいになつておりますので……。お目にとまりましたかどうか、とにかく

毎日と一緒に食事をさせて頂いている者でございます。

ソーニャ テレーギンさんは、よく私たちの仕事をすけてくださって、大切な片腕なんですのよ。(優しく)小父さん、おあけなさいな、もう一杯ついであげましょう。

ヴオイニーツカヤ夫人 おお！

ソーニャ どうかなすって、おばあさま。

ヴオイニーツカヤ夫人 アレクサンドルに言うのを忘れたよ……どうも覚えが悪くなつてね……今日、ハリコフのパーヴェルさんから手紙が来たのさ。……こんど出しなすつたパンフレットを、送ってくださいなすつたんだよ。……

アーストロフ 面白いものですか。

ヴオイニーツカヤ夫人 面白いけれど、なんだか妙な気もしますよ。七年まえ、さんざん肩を持った説を、今度は否定していなさるんだからね。呆れたものですよ。^{あき}

ワーニャ なあに呆れることはないでさ。まあ、お茶でもあがったら、お母さん。ヴオイニーツカヤ夫人 でもわたしは、話がしたいんだよ。

ワーニャ だが、私たちはこれでもう五十年も、のべつお喋りしゃべをしたり、パンフレットを讀んだりして来たじゃありませんか。いいかげんでもう、やめてもいい時分ですよ。

ヴオイニーツカヤ夫人 お前は、どういうわけだか、わたしの話を聞くのがお厭いやと見えるね。悪かったらあやまるけれど、ジャン、お前はこの一年のうちにすっかり変ってしまった、今じゃ別な人を見るような気がしますよ。……以前は、ちゃんとした信念のある、明るい人間だった。……

ワーニャ ええ、そうですとも！ 僕は明るい人間でしたが、そのくせ誰一人として、明るくしてはやれなかった。……（間）この僕が明るい人間だった。……これほど毒つきの強い皮肉は、ほかにちよつとないな。僕もこれで四十七です。去年までは僕もあなたと同じように、あなたのその屁理屈へりくつでもって、わざと自分の目をふさいで、この世の現実を見まい見まいとしていたものです、——そして、それでいいのだと思っていました。ところが今じゃ、一体どんなさまになっているとお思いです！ 僕は、腹が立って、いまいまして、夜もおちおち眠れやしない。望みのものがなんでも手にはいったはずの若い時を、ぼやぼや無駄にすごしてしまつて、この年になつた今じゃ、もう何ひとつ手に入れることができないんですからねえ！

ソーニャ ワーニャ伯父さん、面白くないわ、そんなお話！

ヴオイニーツカヤ夫人（息子に）お前は自分の昔もっていた信念を、なんだか怨うらみに思

つておいでのようだね。……けれど、悪いのは信念ではありません、お前自身なのだよ。信念そのものはなんでもない、ただの死んだ文字だということを、お前は忘れていたのです。……仕事をしなければならなかったのですよ。

ワーニャ 仕事ですって？ だが人間みんながみんな、物を書く自働人形になれるとは限りませんからね、——あなたの教授閣下みたいになえ。

ヴォイニーツカヤ夫人 それは一体なんのこと？

ソーニャ (哀願するように) おばあ様！ ワーニャ伯父さん！ 後生ですから！

ワーニャ 黙るよ。黙って、あやまるよ。

間。

エレーナ いいお天気だこと、きょうは。……暑くもなし。……

間。

ワーニャ　こんな天気^に首をくくつたら、さぞいいだろうなあ。……

テレーギン、ギターの調子を合せる。マリーナ、家のまわりを歩きながら庭鳥を呼ぶ。

マリーナ　とう、とうとうと……

ソーニャ　ばあや、百姓たちは何しに來たの？

マリーナ　相変らず一つことですよ、あの荒地のことですよ。とう、とうとうと……

ソーニャ　何を呼んでるのさ。

マリーナ　ぶちのめんどり鶏が、ひよつ子を連れて、どこかへ行ってしまったんですよ。……
からす鴉にさらわれなけりやいいが……（退場）

テレーギン、ポルカを弾く。一同だまって聞き入る。下男登場。

下男　お医者さまはこちらですか。（アーストロフに）おそれいますが、アーストロフ

先生、お迎えが参りました。

アーストロフ どこからだい。

下男 工場こうばからで。

アーストロフ (いまいましげに) ありがたい仕合せだ。とにかく、行かなきゃなるまい。

…… (帽子を目で捜す) ちえつ、いまましい……

ソーニャ ほんとに、お気の毒ねえ。……工場のご用が済んだら、おひるをあがりいらしてくださいね。

アーストロフ いいや、晩おそくなるでしょう。どうして……とてもとても…… (下男に) 君

すまないが、ウオトカを一杯たのむよ。ほんとにさ。(下男退場) どうして……とても

……とても…… (帽子を見つける) オストロフスキイのなんとかいう芝居にね、ばか

でつかい口髭を生はやした、さっぱり能のない男が出てくるが。……僕がつまりそれだな。

では皆さん、失礼します。…… (エレーナに) もしそのうち、このソーニャさんとご一

緒に、わたしのところへもお立寄り願えたら、ほんとに嬉うれしく存じます。地所といって

も僅わずかなもので、三十町歩そこそこですが、まあご興味がおありでしたら、三百里四方

どこを捜してもないような、模範的な庭と、苗木の林をぐらんに入れます。うちの地所

の隣に、官有林がありましたね。……その森番が年寄りで、おまけに病氣ばかりしているものですから、実際のところ、この私が、何から何までさいはい配はいをふっているようなものです。

エレーナ あなたが大そう森や林のお好きな方だということは、もう承っておりますわ。

それはもちろん、たいへん世の中のためになることには違いないでしょうけれど、でもご本職の邪魔にはなりませんこと？ だって、お医者さまでらっしゃいますものね。

アーストロフ 何がわれわれの本職か、ということは、神さまだけがご存じです。

エレーナ で、面白くていらっしゃる？

アーストロフ ええ、面白い仕事です。

ワーニャ (皮肉に) すこぶるね！

エレーナ (アーストロフに) あなたはまだ、お若くてらっしゃるわ、お見受けするところ……そうね、三十六か七ぐらい。だから本当は、おっしゃるほどには面白がつてらっしゃらないのよ。しよつちゆう森や林のことばかり。それじゃあんまり単調だとあたし思うわ。

ソーニャ いいえ、それがとても面白いんですの。アーストロフさんは毎年まいねん々々、あた

らしい林を植えつけて、そのご褒美ほうびにもう、銅牌どうはいだの賞状だのを、もらっていらつしやいますの。古い森が根絶やしにならないように、いつも骨折こっしってらつしやるんです。このかたの話をとつくりお聞きになつたら、きつとなるほどお思いになりましてよ。ドクトルのお説だと、森林はこの地上を美しく飾って、美しいものを味あじわう術すべを人間に教え、おどかな氣持を吹きこんでくれる、とおっしゃるんですの。森林はまた、きびしい氣候を和やわらげてもくれます。氣候のおだやかな国では、自然との闘こいに力を費やすことが少ないので、したがってそこに住む人間の性質も、優しくて濃こまやかです。そういう土地の人間は、顔だちが好よくつて、しなやかで、ものに感じやすく、言葉はみやびやかで、動作はしとやかです。そこでは学問や芸術が栄え、哲学も暗い色合いを帯びず、婦人にたいする態度も、上品で優美です。……

ワーニャ（笑いながら）いや、ブラボー、ブラボー……お説は一々ごともつともだが、疑問の余地もなきにしも非あらずだね。だからね（とアーストロフに）僕だけには一つ、相変らずストーブに薪まきをくべたり、材木を使って小屋を建てたりすることを、お許しねがいたいものだね。

アーストロフ ストーブなら泥炭でいたんを焚たけばいいし、小屋なら石で造ればいいじゃないか。

もつとも、必要とあらば、木を伐り出すのに反対はしないが、わざわざ森を根絶やしにする必要が、どこにある？ 今やロシアの森は、斧の下でめりめり音を立てているよ。

何十億本という木が滅びつつあるし、鳥やけもの棲家は荒されるし、河はしだいに浅くなつて涸れてゆくし、すばらしい景色も、消えてまた返らずさ。というのも、人間というやつが元来無精者で、腰をまげて地面から焚物を拾うだけの才覚がないからさ。

(エレーナに) そうじゃないでしょうか、ねえ、奥さん。あれほど美しいものをストーブで燃しちまつたり、われわれの手では創り出せないものを滅ぼしてしまうような乱暴は、よつぽど無分別な野蛮人ででもない限り、できるはずはありませんよ。人間は物を考える理性と、物を創り出す力とを、天から授かっています。それでもつて、自分に与えられているものを、ますます殖やして行けという神さまの思召しなんです。ところが、今日まで人間は、創り出すどころか、ぶち毀してばかりいました。森はだんだん少なくなる、河は涸れてゆく、鳥はいなくなる、氣候はだんだん荒くなる、そして土地は日ましに、愈々ますます痩せて醜くなつてゆく。(ワーニヤに) そらまた君は、例の皮肉な目で僕を見ているね。僕の言うことは残らずみんな、君には真面目に受けとれないんだ。もつとも……もつとも、こうしたことは実際のところ、正気の沙汰じゃない

かもしれん。しかしね、僕のおかげで、伐採の憂目うれきめをまぬかれた、百姓たちの森のそばを通りかかったり、自分の手で植えつけた若木の林が、ざわざわ鳴るのを聞いたりするど、僕もようやく、風土というものが多少とも、おれの力で左右できるのだということに、思い当るのだ。そして、もし千年のち人間が仕合せになれるものとすれば、僕の方も幾分はそこらに働いているわけなのだ、そんな気がしてくるのだ。白樺しらかばの若木を自分で植えつけて、それがやがて青々と繁しげつて、風に揺られているのを見ると、僕の胸は思わずふくらむのだ。そして僕は……（下男がウオトカのグラスを盆にのせてくるのを見て）だがしかし……（飲む）もう行かなかりやならん。まあ結局のところは、こんなことは一切、正気の沙汰じゃないかもしれないがね。ではご機嫌よう、皆さん！（家のほうへ行く）

ソーニャ （彼と腕を組んでいっしょにゆく）今度はいつおいでになって？

アーストロフ わかりませんな。……

ソーニャ また、ひと月もしてから？……

アーストロフとソーニャ、家の中へはいる。ヴォイニツカヤ夫人とテレエギンが、

テーブルのそばに残る。エレーナとワーニヤは、ベランダのほうへ行く。

エレーナ　ワーニヤさん、またあなたは、やんちゃぶりを発揮なすつたのねえ。わざわざ自働人形なんてことを言いだして、お母さまの気を悪くしないじやいられないのね！

けさの食事の時も、またアレクサンドルと言い合いをなさるし、つまらないことだわ。

ワーニヤ　だがもし、わたしが本気であの人を憎んでいるとしたら！

エレーナ　アレクサンドルを憎むなんて、意味ないことよ。あの人だって、べつに変わった人間じゃないんですもの。あなたより悪い人でもなし。

ワーニヤ　もしもあなたが、自分の顔や、自分の立ち居振舞いを、われとわが目で見られたらなあ。……あなたは生きているのが、じつに大儀そうですよ！　じつになんとも、

大儀そうですよ！

エレーナ　ええそりやあ、大儀でもあり、退屈でもありますわ！　みんな寄ってたかって、宅の悪口ばかり言つて、あたしを気の毒そうな目で見るのよ。可哀かわいそうに、あんな年寄りの亭主を持つてさ、と言わんばかりにね。そういつて同情してくださる気持——それは本当によくわかるの！　現にさつき、アーストロフさんも仰おっしやったとおり、あなた

がたはみんな、分別もなく森を枯らしてばかりいるので、まもなくこの地上は丸坊主まるぼうずになってしまふんだわ。それと同じように、あなたがたは、分別もなしに人間を枯らししているの、やがてそのおかげで、この地上には貞節も、純潔も、自分を犠牲にする勇氣も、何ひとつなくなってしまうでしょうよ。どうしてあなたがたは、自分のものでもない女のこと、そう気に病むんでしようねえ。わかっていきますわ、それはドクトルの仰おっしやるとおり、あなたがたは一人のこらず、破壊とやらの悪魔をめいめい胸の中に飼おってらつしやるからなのよ。森も惜しくない、鳥も、女も、お互い同士の命も、何ひとつ大事なものはない。……

ワーニャ 僕、そんな哲学は嫌きらいですよ！（間）

エレーナ あのドクトルは、疲れきつたような神経質な顔をしてらつしやるわね。いい顔だわ。ソーニャはどうやら、あの人が好きで、恋しているらしいけれど、その気持はあたしにもわかるの。あたしが来てから、あの人はもう三度もここへ見えたけれど、あたしは内気なたちだもので、一度もゆつくりお話ししたこともないし、やさしい言葉一つかけてあげたこともない。ずいぶん意地の悪い女だと、思ってたつしやるでしょう。ねえワーニャさん、あなたとあたしがこんなに仲がいいのも、きっと二人とも陰気くさい、

わびしい人間だからなんでしょうね！ほんとに私たち、陰気くさいわ！ そんなに人の顔を見るものじゃなくてよ。あたしそんなこと嫌い。

ワーニヤ　じゃあほかに、どんな眺めようがあるというんです、こんなにあなたが好きなのにさ！　あなたは、わたしの悦びよろこです。わたしの命です、わたしの青春です！　そりゃもちろん、思い思われるという見込みがほとんどなくて、まずゼロに等しいことぐらい、よく心得ています。が僕は、何もいらぬ。ただあなたの顔を眺め、あなたの声を聞くことさえできれば……

エレーナ　しつ、人が聞きますよ！（家へはいろいろとする）

ワーニヤ　（あとを追いながら）好きだと言ったつていいじゃありませんか。どうぞそりゃ邪慳じゃけんにしないでください。それだけでもう、僕はほんとに仕合せなんです。……

エレーナ　ああ、困ったわ。……（二人、家の中へ消える）

テレーギン、ギターの弦を打って、ポルカを弾く。ヴォイニツカヤ夫人はパンフレットの余白に何やら書きこんでいる。

—
幕
—

第二幕

セレブリヤコフ家の食堂。——夜。——庭で夜回りが拍子木ひょうしぎを打つ音。

セレブリヤコフ、あけ放した窓の前の肘ひじかけ椅子いすにかけて、まどろんでいる。
エレーナ、その傍そばで、やはりまどろんでいる。

セレブリヤコフ（目がさめて）誰だ、そこにいるのは？ ソーニヤかい？

エレーナ あたしですよ。

セレブリヤコフ レーノチカ、お前か。……どうも、たまらないほど痛むよ！

エレーナ 膝ひざかけが、床ゆかへ落ちてるわ。（両足をくるんでやる）いかがアレクサンドル、窓をしめましようか。

セレブリヤコフ いいや、息苦しくてならん。……今しがた、うとうとしたら、妙な夢を見たよ。わたしの左脚が、人のものになってしまったのさ。あんまり痛むので目がさ

めた。いや、こいつは痛風じゃない、どっちかといえ、リヨーマチのほうだ。今なん時だね？

エレーナ 十二時二十分すぎ。(間)

セレブリヤコーフ 朝になったら、図書館でバーチュシコフの全集を捜してみておくれ。

たしか、うちにあったと思うが。

エレーナ ええ？

セレブリヤコーフ 朝になったら、バーチュシコフを捜してくれ、というんだよ。たしか、あつたような気がする。だが、なんだって、こう息苦しいんだろくなあ？

エレーナ お疲れだからですよ。これでふた晩も、おやすみにならないのですもの。

セレブリヤコーフ ツルゲーネフは、痛風から扁桃腺へんとうせんが腫はれたという話だ。わたしも、

そうならなければいいが、まったく、年をとるといふことは、じつになんともはやいや厭いやなことだな。いまましい。年をとるにつれて、われとわが身がつくづく厭いやになるよ。お

前たちだつてみんな、このわたしを見るのが、さぞ厭いやだろくなあ。

エレーナ 年をとつた年をとつたつて、まるでそれが、あたしたちのせいみたいに仰おつしやるのね。

セレブリヤコーフ さしずめお前なんか、いちばんわたしを見るのが厭な組だろうよ。

エレーナ立ちあがって、少し離れたところに腰をおろす。

セレブリヤコーフ お前がそう思うのも、無理はないさ。わたしもばかじやないから、そのぐらいのことはわかる。お前は若くて、健康で、器量よしで、生きる望みに燃えている。なのに、わたしは老いぼれで、まずもって死人も同然だ。今さら、どうしようもないじゃないか？ そのへんのが、わからんわたしだとしても言うのかね？ そりやもちろん、わたしがこの年まで生きてきたのは、ばかげたことさ。だが、もう暫くしばらくの辛抱だ。じきにお前たちみんなに、厄介払いさせてやるからな。そういつまで、ぐずぐずしているわけにもゆくまいからなあ。

エレーナ あたし、病気になつてしまう。……後生だから、何もおつしやらないで。

セレブリヤコーフ お前の言うことを聞いていると、まるでわたしのせいでみんな病気になるって、退屈して、せつかくの若い盛りを虫ばまれてるのに、このわたしだけが生活を楽しんで、なに不足なく暮しているように聞えるね。うん、まあ、そんなこつたらう

ね！

エレーナ 何もおっしゃらないですよ！ まるで責め殺されるみたいだわ！
セレブリヤコーフ どうせそうだよ、みんなわたしに責め殺されるのさ。

エレーナ (泣き声で) ああ、たまらない！ だから、このあたしに、どうしろと仰しゃるの？

セレブリヤコーフ 別にどうとも。

エレーナ それじゃ、もう何もおっしゃらないですよ。後生だから。

セレブリヤコーフ 妙な話じゃないか。あのワーニャだの、脳みその腐ったお袋さんだのが喋りだすと、みんな一も二もなく、黙って拝聴するが、わたしが一言でも口を利こ

うものなら、すぐみんな白けた顔をするんだ。声を聞いても、ぞつとすると、うやつだ。

なるほど、わたしは厭なやつで、がりがり亡者^{もうじや}で、暴君かもしれない。——だがそれ

にしたって、わたしはこの年になつてまで、自分の意見を持ちだすいささかの権利もないと、いうのだろうか？ わたしは、それだけの値打ちもない男なのだろうか？ どう

だね、わたしは気楽な老後を送る権利もなければ、人様にいたわってもらふ資格もない人間なのかね。

エレーナ 誰も、あなたの権利のことなんぞ、とやかく言つてやしないわ。（窓が風にあおられてボタンとしまる）風が出てきた、窓をしめましょう。（しめる）一雨来そうだわ。誰もあなたの権利のことなんぞ、とやかく言つてやしないわ。

間。夜番が庭で拍子木を打ち。
鼻唄はなうたをうたう。

セレブリヤコフ わたしは一生涯、学問に身をささげ、書齋になじみ、講堂に親しみ、れっきとした同僚たちと交際してきたものだ。——それが突然、いつのまにやら、こんな墓穴みたいところへ追いこまれて、来る日も来る日も、愚劣なやつらを見たり、くだらん話を聞かなければならぬのだ。……わたしは生きたい、成功がしたい、有名になつて、わいわい言われたい。ところが、ここときた日にや、まるで島流しみたいなものじゃないか。のべつ幕なしに、昔のことをなつかしがったり、他人の成功を気に病んだり、死神の足音にびくついたりする。……ああ、たまらん！ やりきれん！ だのにこの連中は、わたしの老後を、いたわつてもくれないのだ！

エレーナ もう少しの辛抱よ。もう五、六年もすれば、あたしもお婆ばあさんになりますわ。

ソーニャ登場。

ソーニャ お父さま、あなたはご自分で、アーストロフ先生を呼べと仰しやったくせに、いざあの方が見えると、会おうともなさらないのね。失礼よ。人さまにご迷惑をかけたばなしで……

セレブリャコーフ お前さんのアーストロフなんか、わたしになんの用がある？ あの男の医学の知識は、わたしの天文学ぐらいなところだろうて。

ソーニャ まさかお父さまの痛風のため、医科大学の先生総出で、来ていただくわけにもゆきませんわ。

セレブリャコーフ あんな唐変木とうへんぼくとは、わたしは話もしたくないよ。

ソーニャ どうぞご勝手に。(坐るすわ)わたし一向かまいません。

セレブリャコーフ なん時だね？

エレーナ 十二時すぎ。

セレブリャコーフ どうも息苦しい。……ソーニャ、テーブルの上の水薬を取っておくれ。

ソーニャ はい。(水薬をわたす)

セレブリヤコーフ（いらだつて）ええ、それじゃない！ 用事ひとつ頼めやしない。
 ソーニヤ そう駄々をこねないでちょうだい。そんなこと、人によっては好きかもしれない
 いけれど、わたしは、真つ平ご免ですわ！ わたし、そんなお相手をしている暇はない
 の。明日は草刈だから、早起きしなければならないの。

ソーニヤ、部屋着すがたで、蠟燭ろうそくを持って登場。

ソーニヤ いやいよ一荒れくるぞ。（稲妻）そうら来た。エレーナさんもソーニヤも、向
 うへ行つておやすみ。僕が代るから。

セレブリヤコーフ（おびえたように）いや、それは困る！ この人のお相手だけは勘弁
 してくれ。喋りしゃべりでしたら最後、きりがなから。

ソーニヤ しかし、この連中だって、休ませてやらなきやいけませんよ。これでふた晩も
 寝ていないのですからね。

セレブリヤコーフ ああ、勝手に行つて寝るがいい。だが君も行ってくれたまえ。後生だ。
 お願いだ。昔のよしみに免じて、このまま引取つてくれたまえ。あとでまた話そう。

ワーニャ（冷笑を浮べて）昔のよしみか……昔のね……

ソーニャ およしになって、ワーニャ伯父さん。

セレブリヤコフ（妻に）ねえ、お前。たのむから、この人と二人つきりにしないでおくれ！ 喋りだしたら、際限がないからね。

ワーニャ こうなると、むしろ滑稽こっけいだよ。

マリーナ、蠟燭を手に登場。

ソーニャ はやく寝たらいいのにさ、ばあや。もう晩おそいのよ。

マリーナ サモワールがまだ出しつ放しになっていきますもの。おいそれと寝られも致いたしませんよ。

セレブリヤコフ みんな寝られないで、へとへとなのに、わたし一人、泰平楽を並べているわけだな。

マリーナ（セレブリヤコフに近寄って、やさしい声で）いかがですか、旦那だんなさま。お痛みですか？ わたくしも、この脚あしがやはり、ずきずきしておりますよ。（膝掛を直し

てやる) このご病気も、ずいぶん久しいことでございますね。ソーニヤちゃんの母御の、亡なくなったヴェーラさまだつても、幾晩も寝ずに、苦勞なすつたものでございましたよ。……あのとおりの旦那さま想いでらつしやいましたからねえ。……(間) 年寄りというもの、子供も同じこと、いたわつてもらうのが何よりの慰めなのに、誰ひとり年寄りなんぞ、いたわつてくれる人はありませんよ。(セレブリヤコーフの肩に接吻する) さ、旦那さま、お寢床へ参りましょう。……さあさあ、参りましょう。……菩提ぼだいじゆ樹の花のお茶を、入れて差上げましょう、おみ足を温ぬくめて差上げましょう。……よくおなりになるように、神さまに祈つて差上げましょう。……

セレブリヤコーフ (感動して) ああ行こう、ばあや。

マリーナ わたしくだつても、この脚が、すぎすぎいたしますよ……すぎすぎ。(ソーニヤと共に教授を連れてゆきながら) 亡なくなったヴェーラさまは、しよっちゆう気をもみなすつて、涙をこぼしておいででしたよ。……このソーニヤちゃんも、あのころはまだ、ほんとお小さくつて、頑がんげ是ぜなくつて。……さあさ、おいでなさいまし、旦那さま。……

……

セレブリヤコフ、ソーニャ、マリーナ退場。

エレーナ あの人のおかげで、へとへとだわ。今にも倒れそうだわ。

ワーニャ あなたは、あの人のおかげ。ところが僕は、ほかならぬ僕自身のおかげで、すっかりへととですよ。これでもう三晩も寝ないんですからね。

エレーナ おかしな家ですことね、ここは。あなたのお母さまは、パンフレットとお婿さんむこのほかはいっさいお嫌い、そのお婿さんといったら、かんしゃく癩癩ばかり起して、あたしを信用してくれず、あなたの前でびくびくしているし。ソーニャはソーニャで、父親に当り散らすばかりか、あたしにまでぶりぶりして、これでもう二週間も口を利きいてくれません。あなたはどうかというと、宅がお嫌いで、現在のお母さまをてんでばかにしてらっしゃる。あたしはもう気がいらいらして、今日なんか、二十ペンも泣きたくなつたわ。……おかしな家ですことね、ここは。

ワーニャ 哲学はよろしう。

エレーナ ねえ、ワーニャさん、あなたは教育のある、頭のできたかたですから、おわか
りのはずだと思いますけど、この世の中を滅ぼすのは、強盗でも火事でもなくって、む

しろ怨みだとか憎しみだとか、そういったごくつまらないいざこぎなのですわ。……ですからあなたも、不平ばかり仰しやらずに、みんなを仲直りさせる役にお回りになるといいわ。

ワーニャ　じゃ、まず第一に、この僕を僕自身と仲直りさせてください。ああ、エレナさん……（彼女の手に唇を当てようとする）

エレナ　いけません！（手を振りはなす）あちらへいらして！

ワーニャ　もうじき雨もあがるでしょう。そして草も木もあらゆるものが生き生きとよみがえって、胸いっぱい息をつくことでしょう。しかし僕だけは、あらしも神鳴りも、心の曇りを洗い落してはくれないのだ。自分の一生はもう駄目だ、取返しがつかない、という考えが、まるで主か魔物のように、よる昼たえまなしに、僕の胸におつかぶさっているのです。過ぎ去った日の、思い出もない。くだらんことに、のめのめと浪費してしまったからです。じゃ現在はどうかと言うと、いやはやなんともはや、なっちゃいない。これでも僕は生きていますつもりです。これでも僕は、人間らしい愛情を持っているつもりです。だがそれを、一体どうしたらいいんです？ どうしろとおっしゃるんです？ 僕の間人らしい気持は、まるで穴ぼこに射した陽の光のように、むなしく消えてゆく

です。そして僕という人間も、自滅してゆくんです。

エレーナ あなたが、その愛だの愛情だのという話をなさると、あたしはなんだかぼうつとしてしまって、どう言つていいかわからなくなるわ。濟まない——とは思いますが、ど、何ひとつ申しあげることができないの。(行こうとする) おやすみなさい。

ワーニャ (立ちふさがって) それだけじゃありません。この家のなかで、もう一つの命——そのあなたの命が、やつぱりじりじりと虫ばまれてゆくのを見ると、僕はもう居ても立つてもいられないんです。一体あなたの行く手に、どんな望みがあるというのです。ろくでもない哲学で、自分の命をちぢめるのは、もういいかげんにしましょう。それがわかつたら、ねえ、それがわかつたら……

エレーナ (じつと男の顔を見る) ワーニャさん、あなた酔つてらつしやるのね!

ワーニャ そうかもしれない、そうかも……

エレーナ ドクトルはどこ?

ワーニャ あちです……僕の部屋に泊っています。ふむ、そうかもしれない、大いにそうかもしれない。……何がもちあがるか、わかつたものじゃないからなあ!

エレーナ 今日もまた、お飲みになつたのね! 一体どういふおつもり?

ワーニヤ 少しは、生きてるような気がしますからね、飲むと。……ほっといてください、エレーナさん！

エレーナ 以前は、一滴もあがらないし、そんなお喋り屋さんでもなかったあなたなのに。……さ、あちらへいらして、おやすみなさい！ あなたの相手は、退屈ですわ。

ワーニヤ (また女の手を唇を当てようとする) わたしの大事な……エレーナさん！

エレーナ (腹だたしげに) さわらないでちょうだい。ほんとに厭いやなこと。

退場。

ワーニヤ (一人) 行ってしまった。……(間) 死んだ妹のところで、おれは十年前、ちよいちよいあの人に逢あったものだ。あの人十七で、おれは三十七だった。なんだっておれはあの時、あの人に恋して、さつさと結婚を申込まなかつたのだろう。造作もなかつたのになあ！ そうすれば、今はもうちゃんと、あの人はおれの細君なのになあ。……そう。……さしずめ今ごろは、二人ともあのだしや降りて目をさまして、あの人か神鳴りの音におびえると、おれはすっかり抱きしめてやって、「大丈夫だよ、僕がついて

るからね」——そう囁いてやる。ああ、すばらしい夢だ。じつにすてきだ、思わずにっこりしたくなるほどだ。だが、いかんいかん、おれはまた頭の中がこんぐらかつてきたぞ。……なぜおれは年をとってしまったのだ？　なぜおれの気持があの人に通じないのだ？　あの飾り気たつぷりの言い回し、カビの生えた女大学式な考え、世の中を滅ぼすものとかなんとかいう、愚にもつかない屁理屈——いやはや、じつにやりきれん。（間）それにしてもおれは、まんまと一杯くつたものだなあ！　あの教授閣下を——あのやぐざな痛風やみを、おれは心底しんぞこから崇拜して、まるで牛みたいにやつのために働いてきたのだ！　おれはソーニャと二人で、この地所から、最後の一しずくまで搾り上げてしまった。おれたちは高利貸みたいなまねまでして、胡麻ごまの油だの、豌豆えんどうまめだの、チーズだのを売りさばいて、自分たちは食う物も食わずに、一銭二銭の小銭から何千という金を積み上げて、あいつに仕送りしてやったのだ。おれは、あいつやあいつの学問が自慢で、それがおれの生き甲斐がでもあれば励みでもあったのだ！　あいつの言うこと書くこと、みんなおれにはすばらしい天才的なものに思えた。……ふん、ところが今はどうだい。あいつがいざ退職してみれば、あいつが一生かかって何をやり上げたか、今じやすっかり見透しだ。あいつが死んだあと、一ページの仕事だつて残るものか。あいつ

は名もない馬の骨だ、ゼロだ！ シャボンの泡だ！ おれはまんまと騙されたんだ……
今こそわかった——きれいさつぱり騙されたんだ。……

アーストロフがチョッキもネクタイもなしのフロック姿で登場。一杯機嫌である。
あとからテレーギンが、ギターをかかえて出る。

アーストロフ おい、弾けよ！

テレーギン 皆さん、おやすみじゃないか。

アーストロフ いいから弾けつたら。

テレーギン、そつと弾く。

アーストロフ (ワーニヤに) 君ひとりかい？ ご婦人はいないのかね？ (腰に手を当てがって、小声で唄う) 「家鳴り震動、ペチカも踊る、亭主やどこにも、寝られない」……つてね。僕は神鳴りのおかげで目がさめちまった。ひどい降りだったね。もう何時

だろう！

ワーニャ 誰が知るもんか。

アーストロフ なんだから、エレーナさんの声がしていたようだが。

ワーニャ ついさつきまで、ここにいたよ。

アーストロフ まったく、ようちよう窃 窀ちゆうたる美人だなあ。(テーブルの上の薬壘びんを改めてみる)

みんな薬だ。あらんかぎりの処方しやうが、ずらり行列してるわけだ。ハリコフのも、モスクワのも、トウーラのも。……あの人の痛風しゅんぷうのおかげで、泣かされなかつた町は一つだけであるまい。ほんとに病気なのかい、それとも仮病かい。

ワーニャ 本物さ。(間)

アーストロフ ばかに沈しづんでるじゃないか。教授が気の毒だとも言うのかい？

ワーニャ ほつといてくれ。

アーストロフ それとも、教授夫人にこいわずら恋 患わづらいかね。

ワーニャ あの人は僕の親友だ。

アーストロフ おや、もう？

ワーニャ その「もう」というのは、どういう意味だ。

アーストロフ 女が男の親友になるまでには、こういう手順があるものだ。——はじめは友達、それから恋人、さてその先が親友。

ワーニャ 俗物哲学だ。

アーストロフ へえ？ いや、なるほど。……白状すりやあ、僕もそろそろ俗物の仲間入りさ。現にこのとおり、結構酔っぱらいもするしね。まあ大抵ひと月に一度は、こんなふうに深酒をする。そして、酔っぱらったが最後、僕は思いつきもう、ずうずうしい鉄面皮になる。僕の目には世の中が一切いっさいがっさい合財、一文の値打ちもなくなってしまうんだ。うんとむずかしい手術にも平気で手をつけて、ものの見事にやってのける。どえらい未来の計画を、でつち上げてみたりもする。そうなるともう、自分がただの唐変木とは思えなくなつて、天晴あつぱれ人類に偉大な貢献をすべき人物に見えてくる……偉大なる貢献をね！ そうなつたらもう、僕独特の堂々たる哲学体系が出現して、君たち仲間みんな、虫けらか微生物みたいに見えてくる。(テレーギンに) ワツフル、弾けよ。

テレーギン そりや、あんたの頼みだから、わたしや喜んで弾くけどね、まあ考えてもごらん、——家うちじゆうみんな寝てらつしやるじやないか。

アーストロフ まあ弾けつたら！

テレーギン、そつと弾く。

アーストロフ もう一杯やらなきや駄目だ。行こう。あつちにはまだ、コニヤツクが残っていたはずだ。そして夜が明けたらすぐ、僕の家へ行こうじゃないか。いいね？ うちの助手のやつはね、「いいね」とは決して言わない、きまつて「よかね」って言うんだ。おつそろしい強突張りごうつくばでね。じゃ、よかね？（はいってくるソーニャを見て）これは失礼、ネクタイもしないで。（急いで退場。テレーギンあとに従う）

ソーニャ まあ、ワーニャ伯父さん、またドクトルとお飲みになったのね。どっちもどっちだわ。でも、あの方は今に始まったことじゃないけれど、一体どうなすつたの、あなたは、いい年をして、おかしいわ。

ワーニャ 年なんか関係ないさ。本当の生活がない以上、幻に生きるほかはない。とにかく、何も無いよかまじだからね。

ソーニャ 草刈はすっかり済んだというのに、まいにち雨ばかり、せつかくの草がみんな腐りかけているわ。だのにあなたは、幻を追うのがご商売なのね。うちの仕事を、す

つかり投げだしておしまいになったのね。……働くのは私つきり、精も根も尽きてしま
ったわ。……（驚いて）あら伯父さん、涙なんか！

ワーニヤ なあに、涙なもんか。なんでもないよ……つまらんことさ。……今お前さんが
私を見た目つきが、亡なくなったお前のお母さんにそっくりだったのさ。可愛かわいいソーニヤ
……（むさぼるように、姪めいの手や顔にキスする）ああ妹……おれの可愛い妹……お前は
今どこにいるんだ？ あれが知ってくれたらなあ！ ああ、あれが知ってくれたらなあ
！

ソーニヤ 何を？ 伯父さま、何を知ってくれたらと仰しやるの？

ワーニヤ つらいんだよ、苦しいんだよ。……いや、なんでもない。……やがて……いや
なんでもない。……どれ、行くのでしょうか……（退場）

ソーニヤ （ドアをノックする）アーストロフさん！ 起きてらっしゃる？ ちよつとお
願い！

アーストロフ （ドアの向うで）ただいま！ （やや暫しばらくして登場。ちゃんとチョツキと
ネクタイをつけている）何かご用ですか。

ソーニヤ どうせお好きなものなら、ご自分だけでお飲みになるといいわ。ただお願いで

すから、伯父には飲ませないでくださいましね。あの人には毒ですから。

アーストロフ わかりました。もう一緒にはやりますまい。（間）私は今すぐ家へ帰りま
す。思い立ったが吉日ですからね。馬車に馬をつけているうちに、そろそろ明るくなる
でしょう。

ソーニャ 雨が降っていますわ。朝までお待ちになったら。

アーストロフ 神鳴りは、それで行きました。降られたにしても、大したことはありません
まい。どれ、出掛けるとしましょう。あらためてお願いしておきますが、今夜はもう、
お父さまのところへ私をお呼びにならないでください。私が、痛風だと申しあげると、
お父さまはリョーマチだと仰しやる。寝てらっしゃいと言うと、起きてらっしゃる。今
日なんかは、てんでもう口も利きいてくださらん始末ですからねえ。

ソーニャ 甘やかされつけているものですか。（食器棚の中を捜す）何かちよつとめし
あがりませんか？

アーストロフ そうですね、頂きましようか。

ソーニャ 私は、夜なかに頂くのが好きですの。何か戸棚のなかに、ありますわ。父は若
い頃から、ずいぶん女の人にもてたそうですから、おかげですっかり甘やかされてしま

ったのですの。このチーズ、いかが？（二人とも食器棚の前に立って食べる）

アーストロフ 私は今日、なんにも食べずに、飲んでばかりいました。あなたのお父さんは、じつに気むずかしい人ですね。（棚から酒瓶をおろして）よろしいですか？（一杯

杯ついて飲む）ここには誰もいないから、ぎつくばらんなお話ができますが、どうもこ

のお宅は、わたしには一月ひとつきと我慢ができません。こんな空気のなかにい

たら、息がつまってしまいますよ。……あなたのお父さんときたら、痛風と書物のお化

けみたいな人だし、ワーニヤ伯父さんは鬱ふさぎの虫にとりつかれてめそめそしてるし、お

祖母ばあさんもあのとおり、それから、あなたのままおつ母さん……

ソーニヤ 母がどうかしまして？

アーストロフ 人間というものは、何もかも美しくなくてはいけません。顔も、衣裳いしやうも、

心も、考えも。なるほどあの人は美人だ、それに異存はありません。けれど……じつの

ところあの人は、ただ食べて、寝て、散歩をして、あのきれいな顔でわれわれみんなを、

のぼせあがらせる——それだけのことじゃありませんか。あの人には何ひとつ、しなけ

ればならない仕事がない。あべこべに、人の世話にばかりなっているんです。……そう

でしょう？ しかし、無為安逸な生活は、清らかな生活とは言えません。（間）もつと

も私の見方は、すこしきびしすぎるかもしれない。私も、お宅のワーニャ伯父さんと同様、生活に不満なのです。それで二人とも、だんだん愚痴っぽくなってくるんですよ。ソーニャ　ほんとに生活にご不満？

アーストロフ　そりや一般的に言えば、私も生活が好きです。けれどわれわれの生活、この田舎いなかの、ロシアの、俗臭けいべつふんぷんたる生活は、とても我慢がならないし、心底しんそこから軽蔑けいべつせざるを得ませんね。そこで、じゃお前自身の生活はどうなんだ、と言われると、正直の話、なんともかとも、何ひとつ取柄はないですねえ。ねえ、そうでしょう、まっくらな夜、森の中を歩いてゆく人が、遥はるか彼方かなたに一点のともしびの瞬またたくのを見たら、どうでしょう。もう疲れも、暗さも、顔を引つかく小枝のとげも、すっかり忘れてしまうでしょう。……私は働いている——これはご存じのとおりです。この郡内で、私ほど働く男は一人だつてないでしょう。運命の鞭むちが、小止おやみもなしに私の身にふりかかつて、時にはもう、ほとほと我慢のならぬほど、つらい時もあります。だのに私には、遥か彼方で瞬またたいてくれる燈とも灯しびがないのです。私は今ではもう、何ひとつ期待する気持もないし、人間を愛そうとも思いません。……もうずっと前から、誰ひとりとして好きな人もないのです。

ソーニャ 誰ひとり？

アーストロフ ええ、誰ひとり。ただ、ある種の親しみを、お宅のばあやさんには感じて
 います——昔なじみとしてね。ところが百姓連中ときたら、じつに単調で、無知蒙昧もうまい
 で、不潔きわまる暮しをしているし、インテリ連中はどうかというと、これまた、どう
 も反りが合わない。頭が痛くなるんですよ。つきあい仲間のインテリ連中は、誰も彼も、
 料簡りようけんは狭いし、感じ方は浅いし、目さきのことしか何も見えない——つまり、どだ
 いもうばかなんです。一方、少しは利口で骨のある手合いは、ヒステリーで、分析きち
 がいで、反省反省で骨身をけずられています。……そうした手合いは、愚痴をこぼす、
 人間嫌いを標榜ひょうぼうする、病的なほど人の悪口あくこうをいう、人に近づくにも横合いから寄
 っついて、じろりと横目で睨にらんで「ああ、こいつは気ちがだよ」とか、「こいつは
 法螺吹きだよ」とか決めてしまう。相手の額ぬかに、どんなレッテルを貼はっていいかわから
 なくなると、「こいつは妙なやつだ」と言う。私が森が好きならこれも変てこ。私が肉
 を食べないと、これもやつぱり変てこ。いや、今日こんにちではもう、自然や人間に向って、
 じかに、純粹に、自由に接しようとする態度なんか、薬にしたくもありはしません。…
 …あるものですか！（飲もうとする）

ソーニャ (さえぎって) いけません、どうぞお願いですから、もうあがらないで。

アーストロフ なぜです。

ソーニャ まるであなたに似つかないことですもの！ あなたは、すっかりしたかたで、とても優しい声をしてらっしゃるわ。……わたしの知っている誰よりも彼よりも、ずつとりっぱなかつたですわ。だのに、なぜあなたは、飲んだくれたり、カルタをしたり、そんな凡人のまねがなざりたいの？ ね、そんなまねはなざらないで、お願いですわ！

いつもあなたはおつしやるじやないの、——人間は何ひとつ創つくり出そうとせず、天から与えられたものを毀こわしてばっかりいる、つて。なぜあなたは、なぜあなたは、ご自分でご自分を台なしになさるの？ いけないわ、いけませんわ、後生です、お願いですわ。

アーストロフ (片手を差出して) もう飲みますまい。

ソーニャ 約束してくださいさる？

アーストロフ 約束します。

ソーニャ (ぎゅつと手を握って) ありがとう！

アーストロフ これで打ちどめです！ やつと迷いがさめました。そら、このとおり、私はすっかりもう正気だし、死ぬ日までこれで押し通しますよ。(時計を見て) じゃ、も

う少しお話ししましょうか。僕に言わせるとですね、僕の時代はもう過ぎてしまつて、今じゃ何もかも手後れおくなんです。年はとるし、働きすぎてへとへとだし、俗物にはなるし、感情はすっかり鈍つてしまふし、今ではもう僕は、とても人間とは結びつけそうもありません。現に僕は、誰ひとりとして好きな人はないし、これから先も……好きな人はできません。そんな僕の心を、まだ捉とらえる力があるのは、ほかでもない、美しさというものです。なんぼ僕だつて、これだけには、平氣じゃいられません。仮にもしあのエレーナさんが、その氣になつたとしたら、僕の頭を一日でわけなく狂わしてしまふでしょうね、……だがこれは、愛ではない。結びつきというものでもない。……（片手で両眼をおおい、身ぶるいする）

ソーニヤ どうかなすつて？

アーストロフ いやなに。……この春の初め、僕の患者が、クロロホルムにかかったまま死んじまつたつて。

ソーニヤ そのことなら、もうお忘れになつてもいい時分よ。（間）ねえ、どうお思いになる、アーストロフさん。……仮にもし私に、仲のいいお友達か、それとも妹があつて、その人が……まあ仮に、あなたのことを想おもつているとしたら、——それがわかつたら、

あなたはどうかすつて？

アーストロフ（肩をすくめて）わかりませんね。まあ、どうもしないでしょうね。それとなしに、僕は愛することなんかできないし、……それに第一、そんなこと考えている暇もないことを、その人に悟らせるように仕向けるでしょうね。それはそうと、帰るとすれば、もう時間です。ではご機嫌よう、ソーニャさん、こんな調子で話していたら、それこそ夜が明けてしまいますよ。（握手）もしよろしかったら、客間を抜けさせて頂きたいですな。ひよつとしてワーニャ伯父さんにかまるといけませんからね。（退場）

ソーニャ（一人）あのかたは、なんにも言うてくださらなかったわ。……あのかたの心も胸の中も、相変らず私には見当がつかない。だのに、なぜ私は、こんなに嬉うれしい気持ちをするんだろう？（幸福そうに笑う）わたしはあの人に言うてあげた——あなたはすつきりした、上品なかたで、とても優しい声をしてらっしゃる、つて。……なんだか出し抜けのように聞えはしなかったかしら？ いまだに私の耳のなかで、あのかたの声がふるえながら、優しくいたわってくださいるような気がする……ほら、この空気のなかに、あのかたの声がただよっている。でも、あの妹のことを言いだしたら、あのかたはわかってくださいらなかったわ……（両手をもみしだきながら）ああ厭いやだ厭いやだ、どうして不器

量に生れついたんだろう！ほんとに厭だこと！しかも私は、自分の不器量さかげんをよく知っているわ、ようく知っているわ。……こないだの日曜、わたしが教会から出てきたら、みんなで噂うわさをしているのが聞えたつけ。「あのかたは親切で、優しい人だけれど、惜しいことに器量がね」って……不器量……不器量……不器量……

エレーナ登場。

エレーナ（窓をあけて）雨があがったわ。まあ、いい空気なこと！（間）ドクトルは

どこ？

ソーニャ お帰りになりました。（間）

エレーナ ねえ、ソフィー。

ソーニャ なんですの？

エレーナ 一体いつまで、あなたはそんな顔をしているつもり？ お互い、何ひとつ根に持つことなんかないじゃないの。どうして敵同士かたきにならなきゃいけないの？ もう沢山
だわ。……

ソーニャ わたしだつて……（エレーナを抱きしめる）憤慨するのはもう沢山。

エレーナ それでなくちや嘘うそよ。（二人とも感動のさま）

ソーニャ お父さま、おやすみになつて？

エレーナ いいえ、客間で起きてらつしやるの。……ほんとにこれで、もう何週間も口を利きかずにいたわねえ。べつにこれといつて、わけもいわれもないのにさ……（食器棚のあいているのを見て）おや、どうしたの？

ソーニャ アーストロフさんが、お夜食をあがったの。

エレーナ 葡萄酒ぶどうもあるわ。……仲直りのしるしに、ひとつ飲まない。

ソーニャ ええ、いいわ。

エレーナ このグラスで一緒にね。……（つぐ）そのほうがいいわ。じゃ、これでもう、ママと言つてくれるわね。

ソーニャ ええ。（飲んでキスする）わたし、ずっと前から仲直りがしたかったの。でも、

なんだか恥ずかしくつて……（泣く）

エレーナ おや、何で泣くの？

ソーニャ なんでもないので、ついわたし。

エレーナ さ、もういいわ、もういいわ……（泣く）おばかさんね、あたしまで、泣いちまったじゃないの。……（間）あんたは、あたしがソロバンずくであんたのお父さまの後妻に来たように勘ぐって、それで憤慨していたのね。……でもあたし、誓って言うけれど、あたしがあの人のところへ来たのは、ただ好きだったからなのよ。あの人が学者で、有名な人だというので、あたし夢中になってしまったの。そりやもちろん、そんなもの本当の愛じゃなくて、いいかげんなものには違いないけれど、あのころは本物のような気がしたのよ。あたしのせいじゃないわ。だのにあんたは、あたしたちが結婚したそもその初めから、その利口な疑ぐりぶかい目を光らせて、ずっとあたしを咎めていたのね。

ソーニャ もう仲直りよ、仲直りよ！ 忘れましようよ。

エレーナ そんなふうに見るものじゃないわ——あんたにも似合わない。誰もかも、

みんな信じてゆかないことには、とても生きちゃ行けないものよ。（間）

ソーニャ ねえ、本当のところを聞かせてくださらない、仲好なかよしになつたんだから。……

ママ、お任せ？

エレーナ いいえ。

ソーニャ やつぱり、そうだったのね。じゃ、もう一つ。かくさずにおっしやってね——
パパがもつと若かったらと、お思になる？

エレーナ あんた、まだ子供ねえ。そりや、そう思うわよ。（笑う）さ、なんでもいいから、どしどし聞いてちょうだい。……

ソーニャ あのドクトル、いい人だとお思になつて？

エレーナ ええ、とても。

ソーニャ （笑う）わたし今、ぼうつとばかみたいな顔をしているでしょう……ね？
あのかた、さつきお帰りになつたのに、わたしにはまだ、あのかたの声や足音が聞えるのよ。あの真つ暗な窓を見ても、あのかたの顔が浮んでくるの。どうぞ、みんな言わせてちょうだい。……でも、とてもこんな大きな声じや言えないわ、恥ずかしいんですもの。
わたしの部屋へ行つて、お話ししましょうよ。ばかな娘だとお思になる？ きつとそうだわ。……でもあの人のこと、何か話して聞かせて。……

エレーナ 何かつて、なあに？

ソーニャ 頭のいいかたね、あのかた。……何もかも心得てらっしやるし、何もかもおできになるんですもの。……病人を治したり、森を植えついたり……

エレーナ 植林だの医術だのということは、じつは大した問題じゃないのよ。……ねえ、いいこと、——肝心なのは、有能だということなのよ！ この有能だというのが、どういうことだか、あんた知って？ 何ものをも怖れない勇氣、何ものにも捉とらわれない頭の働き、こせこせしない遠大な物の見かた……だわ。木を一本植えるにしたって、千年たつたら、それがどうなるかということ、あの人はずっと考えていて、人類の幸福というものはつきり眼に浮べてらっしゃるのよ。ああいう人は滅多にいません、だから大事にいたわってあげなければならぬの。……お酒を飲んだり、たまさか乱暴な真ま似ねをするといつて、——なんでもないじゃないの。有能な人はこのロシアじゃ君子然とすましちやいられないものなのよ。考えてもみるがいいわ、あのドクトルの生活ときたら、はたから見てもぞつとするほどじゃなくて？ 道路といえ、二進にっちも三進さつちも行かないぬかるみだし、身を切るような風、ふぶき、行けども行けども涯はてしない道のり。おまけに相手にする百姓たちときたら、がさがさした、けだものみたいな連中ばかりだし、ぐるり一面どこを見ても、貧乏と病氣なんだもの。そんな中で、来る日も来る日も一所懸命闘っている人に向つて、四十近くまでお酒も飲まずに君子然と構かまえているなんて、虫がよすぎると言うものだわ。……（娘に接吻せつぶんする）あたしは、心からあんたの幸福

を祈るわ。だつてりつぱにその値うちのある人なんだもの。……（立ちあがる）それに引きかえ、このあたしは、どこから見ても退屈な、ほんの添え物みたいな女なのよ。……音楽をやつても、お嫁に来てみても、浮いた噂が立つ時でも——いっどんな場合でも、要するにあたしは、ほんの添え物みたいな女なのだわ。ほんとを言うと、ねえソーニャ、あたしほど不仕合せな女はないと、つくづく思うの！（興奮して舞台をあちこち歩き回る）あたしには、この世の仕合せなんか似つかないのよ。ええ、似つかないのよ！おや、何を笑うの？

ソーニャ（顔をかくして笑いながら）わたし、ほんとに嬉しいの……嬉しいの！

エレーナ ああ、ピアノが弾きたくなつた。……何か弾いてみようかしら。

ソーニャ ええ、弾いて。（抱きしめる）わたし、どうせ眠れやしないわ。……何か弾いて！

エレーナ ええ、いいわ。でもお父さん、起きてらっしゃるのよ。例のご病気がはじまると、ピアノが癪かんに障さわつてならない人なの。ちよつと行って、伺つてみるといいわ。かまわないとおっしゃつたら弾くから。ね。

ソーニャ ええ、伺つてくるわ。（退場）

庭で夜番の拍子木ひょうしぎの音。

エレーナ ずいぶん長いこと弾かなかった。思いつきり弾いて泣いてみよう、ばかみたい
に泣いてみよう。(窓をのぞいて) カチカチ言わせているのは、お前かい、エフイーム。

夜番の声 へえ、あつしで。

エレーナ 鳴らさないでくれ、旦那だんなさまがお悪いんだよ。

夜番の声 すぐ向うへ参りやす！ (口笛を吹く) おいで、黒、黒、おいで！ (間)

ソーニャ (帰ってきて) いけませんって！

—幕—

第三幕

セレブリヤコーフ家の客間。右手、左手、中央と三つの出入口。——昼。

ワーニャとソーニャが腰かけている。エレーナは何か思案しながら、舞台を歩き回っている。

ワーニャ 教授閣下からのお達しによると、われわれ一同、きょう午後一時に、この客間に集まれとのことだった。 (時計を見て) もう一時十五分前だ、何かわれわれ民草たみくさにみことのりがくだるわけだな。

エレーナ 何か用向きがあるんでしょう。

ワーニャ あの人に、用向きも何もあるものか。世迷いよまごとを書く、ぼそぼそ苦情をいう、やきもちを焼く、それだけのことさ。

ソーニャ (咎めるとがような口調で) 伯父さん。

ワーニャ いや、ご免ご免。(エレーナをさして) どうだい、あの人は。歩くにも、さももの憂^うそうに、しやなりしやなりとやっている。いい風情^{ふせい}だなあ、じつに!

エレーナ あなたこそ、一日じゆう、ぼそぼそ言つてらつしやるわ。のべつぼそぼそ言つていて——よくも厭^あきずにいらつしやれるものねえ! (さびしそうに) あたし、退屈で死にそうだわ。一体どうしたらいいんだろう。

ソーニャ (肩をすくめて) 仕事なら、いくらでもあつてよ。する気にさえおなりになれば。

エレーナ 例えば、どんなこと?

ソーニャ 帳簿をつけるなり、百姓の子に物を教えるなり、療治をしてやるなり。仕事はいくらでもありますわ。現にあなたもお父さまもまだここにいらつしやらなかつたころは、わたしワーニャ伯父さんと一緒に、よく市場^{いちば}へ粉を売りに行ったものですわ。

エレーナ そりや無理よ。あたし、そんな興味もないしね。お百姓に物を教えたり、療治をしてやるなんて、理想派の小説に出てくるだけの話だわ。第一あたしが、やぶから棒に思い立って、教えたり療治したりに出かけていくなんで、とてもできない相談だわ。

ソーニャ どうして出かけていって、教えてやる気におなりになれないのか、わたしには

それがわからないわ。まあ見てらつしやい、今に平気になりますから。（エレーナを抱きしめる）退屈はからだの毒よ、ねえママ。（笑いながら）あなたは退屈で、身の置き場もないご様子ですけど、退屈がつてぶらぶらしている人がいると、はたの人にまでうつるものなのねえ。論より証拠、このワーニャ伯父さんは、一日じゅう何もせず、まるで影みたいにあなたの後ろばかり追っかけているし、わたしだってこのとおり、仕事も何もほつたらかして、ママのところへお話に来てしまうでしょう。怠け癖がついたんだわ、しようのないわたし！ あのアーストロフ先生だって、前はごくたまにしかお見えにならず、せいぜい月に一度ぐらい、それも無理やりをお願いして来て頂いたものですけれど、今じやどうでしょう。大事な森も患者も打っちやらかして、毎日ここへ見えない日はありませんわ。あなたは魔法使よ、きつと。

ワーニャ 何をくよくよなさるんです？（声を励まして）ねえ、僕の大事なエレーナさん、せっかくそれだけの器量をしてき、もつと利口になるものですよ！ あなたには、魔性の血が流れている、いつそのこと魔女になっておしまいなさい！ せめて一生に一度は、思いつきりやってごらんなさい。さあ早く、魔物みたいな男の誰かに、首つたけ惚れてごらんなさい。教授閣下をはじめ、われわれ一同が、（両手をひろげて）こう呆

気にとられるぐらい、ずぶりと深みへはまってごらんなさい！

エレーナ（ムツとして）どうしようと、あたしの勝手ですわ！ ずいぶん失礼ねえ！

（行こうとする）

ワーニヤ（引きとめて）まあまあ、エレーナさん、あやまります……赦してください。

（手に接吻して）さあ仲直り。

エレーナ なんぼなんでも、我慢がならないわ。そうじゃなくて？

ワーニヤ めでたく仲直りのしるしに、今すぐ薔薇の花束を持つてくるとしましょう。今

朝はやく、あなたにあげようと思つて作つておいたのです。……秋の薔薇——えも言わ

れぬ、悩ましげな薔薇ですよ。……（退場）

ソーニヤ 秋の薔薇——えも言われぬ、悩ましげな薔薇……（二人、窓のそとをながめる）

エレーナ もう九月なのねえ、結局あたしたち、ここで冬越しをするんだわ！（間）ド

クトルはどこ？

ソーニヤ ワーニヤ伯父さんのお部屋ですわ。何か書いてらっしゃるの。ワーニヤ伯父さ

んが出て行つてくれて、ありがたいわ。わたし、ご相談がありますの。

エレーナ どんなこと？

ソーニャ どんなことつて。(頭をエレーナの胸にうずめる)

エレーナ もう、いいわ、いいわ……(髪を撫なでてやりながら) いいわ。

ソーニャ わたし、器量が悪いの。

エレーナ いい髪の毛だこと。

ソーニャ あんなことを！(振返つて、鏡を見ようとす) いいえ、嘘うそよ。女が不器量

だと、きまつて、「いい目をしている」とか、「いい髪をしている」とか言うものだわ。

……わたしあの人を、もう六年もお慕いしていますの。じつのお母さまより、ずっと好きなくらい。明けても暮れても、あの人声が聞えるような気がするし、あの人握手が、今でも感じられるの。あの人を心待ちにして、じつと戸口を見ていると、今にもあの人、はいつてらつしやるような気がするの。ね、もうおわかりでしょう、こうしてしよつちゆうあなたのお邪魔をしにくるのも、あの人うわさの噂がしたいからですわ。このごろはあの人、毎日のようにここにお見えになるけれど、わたしを見つめてくださるどころか、てんで見向きもなさらないの。……わたし、とてもつらい！ もうこうなつては、とても見込みはないわ、ないわ、ええ、ないわ！(絶望的に) ああ神さま、どうぞ、勇気をお授けくださいまし！……つて、ゆうべは、一晩じゆう、お祈りしましたの。…

：わたしはちよいちよいあの人のそばへ行つて、こつちから話をしかけてみたり、じつとあの人の目を見つめたりします。……わたしもう、見得も何もなし、自分を抑おさえる力もないの。……もう一刻の我慢もなくなつて、きのうワーニヤ伯父さんに、すっかり打明けましたの。……わたしがあの人を慕っていることは、召使たちもみんな知つてますわ。みんな知つてますわ。

エレーナ で、あの人は？

ソーニヤ 知らないの。てんで見向きもしないんですもの。

エレーナ (物思わしげに) 妙な人だわねえ。……じゃ、こうしましょう。あたしから話してみようじゃないの。……遠回しにそつと謎なぞをかけてみるのよ。(間) ほんとに、いつまでそう、どつちつかずじゃあねえ。……ね、いいでしょう。

ソーニヤうなづく。

エレーナ ほんとに、それがいいわ。好きか、好きでないか——それくらいのこと、すぐわかるもの。いいのよ、そんなにそわそわ心配しないで。そつと遠回しに、気取けどられ

ないように聞くからね。イエスカノウか、それだけわかればいいんだもの。(間) もしノウだったら、もうここへは来て頂かないことにしましょうね。そうだね。

ソーニャうなずく。

エレーナ　いつそ顔を見ないほうが、気が楽なもの。さ、そうと決ったら善は急げ、今すぐ訊きいてみることにしようじゃないの。あの人あたしに、何か図面を見せたいと言ってたわ。……ちよつと行って、拝見したいと言って来てちょうだい。

ソーニャ　(ひどく興奮して)あとで本当のこと、すっかり聞かせてくださる?

エレーナ　そりやもちろんよ。本当のことというものは、いいにしろ悪いにしろ、とにかくどつちつかずでいるより、少しは気が安まるもの。あたしにまかせてちょうだい、いい子だから。

ソーニャ　ええ、ええ。じゃわたし、あなたが図面を見たいと言ってらっしゃると、そう言つて来ますわ。……(行きかけて、ドアのそばで立ち止る)いいえ、やっぱりわからないままにいるほうがいいわ。……とにかく、望みだけはあるんだもの……

エレーナ どうしたの？

ソーニャ いいえ、なんでも。(退場)

エレーナ (一人) ひとの胸の中を知りながら、力になってやれないぐらい、厭いやなことはないわ。(思案しながら) あの人はあの子のことを想おもってはいない、それはたしかだ。

だからといって、あの人があの子をお嫁さんにして悪いという理屈はないわ。あの子は器量こそ悪いけれど、あの年配の田舎いなか医者には、願ねがったり叶かなったりの奥さんじゃないの。

利口で、思いやりがあつて、気持がきれいでさ。……いや、こんなことじゃない、こんなことじゃない……(間) あたしには、気の毒なあの子の気持がよくわかる。どうにもやり場のない退屈なその日その日、あたりをうろろしている連中ときたら、人間というよか、いつそ灰色のポツポツとでも言ったほうか、早わかりがするくらい。耳に聞える話といつたら、俗悪なくだらしない話ばかり、ただ食べて、飲んで、寝ることしか知らないような連中が、うようよしている中へ、時々ああして、ほかの連中とは似もつかない、風采ふうさいもよければ話も上手じょうずで、大好きにするあの人かやってくるんだもの。闇夜やみよに明るい月がのぼったみたいなものだわ。……ぼうつとなつて、無我夢中になるのも無理はない。現にこのあたしだって、幾分のぼせ気味らしいもの。まったく、あの人か顔

を見せないと、なんだか物足りないし、あの人のことを考えると、思わずにつこりしたくなるもの。……あのワーニャ伯父さんは、あたしには、魔性の血が流れている、「せめて一生に一度は思いっきりやつてごらんさい」って言ったつけ。……そうねえ、ひよつとすると、それが本当かもしれないわ。……いつそ小鳥みたいに自由になって、さつさとこんな所から飛び出したら、みんなの寝ぼけつ面つらや、あきあきするような長話が見えも聞えもしない所へ行つて、きれいさっぱりみんなのことが忘れてしまえたら。でもあたしは気が小さくつて、引っこみ思案だから……気が咎とがめて仕方がないだろう。……現にあの人は毎日ここへ出かけてくる。その来るわけが、どうやら察しがついてくると、もうあたしは、まるで自分が悪いみたいないな気がして、いつそワーニャの前に膝ひざをついて、泣いてあやまりたいような気持になるんだもの。……

アーストロフ (統計グラフをかかえて登場) ご機嫌よう! (握手) 凶面がごらんになりたいとかいう話ですが。

エレーナ 昨日あなたは、見せてくださるつておっしゃったじゃなくて?……いまお暇ですの?

アーストロフ ええ、もちろん。(カルタ卓の上に凶面をひろげて、鋏びょうでとめる) あなた

のお生れは、どちらです？

エレーナ（手伝いながら）ペテルブルグですの。

アーストロフ 学校はどちらで？

エレーナ 音楽学校でした。

アーストロフ じゃ、こんなもの、つまらないかもしれませんかね。

エレーナ まあなぜ？ そりやあたし、田舎はさっぱり知りませんけれど、本でならずいぶん読みましたわ。

アーストロフ 私は、この家うちにわざわざ自分の机が持ってきてあるんです……ワーニヤ君の部屋にね。患者の応対でへとへとになつて、頭がぼうつとしてくると、私は何もかも放ほつたらかして、いっさんにここへ駆けつけます。そして一、二時間、こんなことをして気を紛らすんです。……ワーニヤ君とソーニヤさんは、算盤そろばんをパチリパチリ言わせている。そのそばで私は自分の机にむかつて、絵具を塗りたくるんです。暖かい落着いた気分で、どこかでコオロギも鳴いている。しかし、こういう楽しみは、そうちよいちよいはやりません。月に一度ぐらいなものです。……（図面を指でさしながら）ではまず、ここをごらんください。これは五十年前の、この郡の有様です。濃い緑、うすい緑

は、森をあらわしたもので、このとおり総面積の半ばを占めています。緑いろのところ
に赤い網目がついているのは、大鹿おおしかや山羊やぎの棲すんでいた場所です。……この図面には、
動物ばかりでなく、植物の分布も示してあります。ほら、この湖には、白鳥や、雁がんや、
鴨かもが棲すんでいましたし、土地の古老の話によると、あらゆる種類の鳥が無慮無数ぐんせに群
棲いしていて、まるで雲のように空を飛んでいたそうです。大小の村のほかにも、このと
おりそこここに、出村だの部落だの、坊さんの庵あんしつ室だの、水車小屋だのが散らばって
います。……牛や馬も、どつさりいました。この水色に塗つてある所がそれです。たと
えばこの区域では、水色が濃くなっています。これは馬が沢山いた場所で、農家一戸
あたり三頭の割合だったそうです。（間）今度は下のほうをごらんください。これが二
十五年前の有様です。これになるともう、森は総面積の三分の一しかありません。大鹿
はまだいるが、山羊はもういません。緑も水いろも、ずっとうすくなっています。まあ
ざっと、そんな調子です。さあ第三図へ移りましょう。これは現在の有様です。緑いろ
はそこかしこに見えますが、一面べつたりというわけではなく、飛び飛びになつていま
す。大鹿も白鳥もヤマドリも、いなくなつてしまいました。……前にあつた出村や部落
や、坊さんの庵室や水車小屋は、今では跡形もありません。これを要するに、だんだん

と、しかも確実に衰えてゆく有様が、見えているわけで、まあもう十年か十五年もしたら、元も子もなくなってしまうに違いありません。あなたがたはそれを、やれ文化の影響だとか、古い生活はしぜん新しい生活に席を譲るべきだとか、仰おつしやることでしょね。なるほど、もしもこんなふうには、森が根絶やしになった跡に、道路が通じ、鉄道が敷けたというのなら、また製粉所や工場こうばや学校が建ったというのなら、そして住民がずっと健康に、ずっと裕福に、ずっと頭が進んだというのなら、私にもうなずけますが、実際はそんな気配は一つもないではありませんか！ この郡内には、相変らず沼地がのさばっているし、蚊はぶんぶん言っているし、道らしい道はないし、百姓は貧乏だし、おまけにやれチフスだ、やれジフテリアだ、やれ火事だ、という始末なのです。……とここで、なぜそんなふうが悪くなったか、と考えてみると、つまりそれは、力にあまる生存競争の結果なのです。……言い換えると、無気力と無知と、徹底的な無自覚とが、こんにち今日このような情勢の悪化を招いたそもその原因なので、つまり飢え凍えこご、病みほうけた人々が、なんとか露命をつなぎ、子供を守ってゆかたために、いやしくも飢えをしぬぎ、身を暖めるたしになるものなら、わつとばかり飛びついて、明日あすのことなどは考えもせず、すっかり荒してしまっただけなのです。……今ではもう、ほとんど完全に

ぶち毀こわしてしまつたのですが、その代りに創つくり出したものは、まだ何ひとつないのです。
(興きざめな口調で) お顔つきで見ると、あまり面白くもなさそうですね。

エレーナ だつてあたし、こういうことよくわからないんですもの。……

アーストロフ わかるのわからないのというほどのことでもありません、ただあなたには、興味がないんです。

エレーナ ほんと言いますとね、あたしほかのことに気をとられていますの。ご免なさ
いね。じつはあたし、あなたにちよつと、お訊ききたいことがあるんですけれど、どう
も具合が悪くつて、言い出しにくいんですの。

アーストロフ 訊ききたいこと？

エレーナ ええ、お訊ききたいことが。いえなに……ほんの罪のない話なの。ま、ここへ
かけましょう。(二人かける) じつはね、ある若い女の人のことなんですの。お互い正
直に、お友達として、あけすけにお話ししましょうね。一たんお話がすんだら、もうそ
れつきり、忘れてしまいましようね。よくつて？

アーストロフ 結構です。

エレーナ お話というのは、あたしの義理の娘、ソーニャのことですの。あなた、あの子

お好き？

アーストロフ ええ、尊敬しています。

エレーナ 女としてお好きですか？

アーストロフ (ややためらって) いいえ。

エレーナ じゃ、あと二言三言——ふたことみことそれでおしまいにしましょうね。あなた、何もお気づきじゃなくて？

アーストロフ 別になんにも。

エレーナ (相手の手をとって) あなたは、あの子のことなんか、心にかけていらつしやらない。そのお目でわかりますわ。……あの子は煩悶はんもんしています。……ね、そこを察して……もうここへは、いらつしやらないで頂けませんこと。

アーストロフ (立ちあがる) 僕はもう、過去の人間です。……それに、暇もないし…… (肩をすくめる) どうしてそんな暇が？ (彼は度を失っている)

エレーナ ああ、なんて厭いやな話だろう。あたしまるで、何千貫もある荷物を背負って歩いたみたいに、胸こゝろがどきどき言っていますわ。でもまあ、よかったわ、済んで。じゃあもう、きれいに忘れましょうね、なんのお話もしなかつたみたいだね、そして……そして、

もうお帰りになつてちようだい。あなたは頭のいいからだから、察してくださいませわね。(間) あたし、すっかり顔が火照つてしまつたわ。

アーストロフ もし一月か二月前に、今の話を伺つたのだつたら、あるいは僕も考えてみたかもしれません。が、今となつてはもう……(肩をすくめる) それに、あの人が煩悶しているという以上、もちろんそりやあ……。ただ一つ、どうもわからないことがある。どうしてあなたは、わざわざこんなことを、僕に訊いてみる氣になつたのです？(相手の目をじつと見つめて、指を立てて脅かす) あなたは——ずるい！

エレーナ なんのこと？

アーストロフ (笑いだして) ずるい人ですよ。じゃ、よござんす、仮にソーニャさんが煩悶しているとしましょう。しかしどうしてそのため、こんな探りをお入れになることがあるんです？(相手の口を封じながら、早口に) まあ、そんなびつくりしたような顔を、なさらないでください。あなたは、なぜ僕が毎日ここへやってくるのか、そのわけをすっかりご存じなのだ。……なぜ、誰のためにやってくるのか、それをちゃんとご存じなのだ。そんな可愛らしい顔をして、あなたはすばしい獣みたいな人だ。そんな眼をして僕を睨まないでください。どうせ僕は、老いぼれた雀ですからね。

エレーナ（けげんそうに）獣みたい？ なんのことやらわからないわ。

アーストロフ　きれいな、毛のふさふさしたイタチですよ。……あなたは、餌食えじきがお入用なんだ！　現にこの僕は、もうこれで一ト月も怠けどおしに怠けて、何もかも放つたらかして、がつがつあなたの姿を追い回している。それがあなたには、堪たまらなく面白いんです。堪たまらなくね。……さあ、いかがですか？　僕はこのとおり、きれいにやられました。

これは、わざわざ訊くまでもなく、先刻ご承知のはずじゃありませんか。（両腕を組み、頭こっぺを垂れて）降参しました。さあどうぞ、存分になすってください。

エレーナ　あなた、どうかなすったのね！

アーストロフ　（歯をくいしばって笑う）なるほど、内気な人は違ったものだ……

エレーナ　まあ、あたしこれでも、あなたが考えてらっしゃるより、少しはましな女ですわ！　ええ誓って。（行こうとする）

アーストロフ　（行く手を遮さへぎって）僕は今日すぐ家へ帰ります。もう二度とここへは来ません。が、その代り……（女の手を取ってあたりを見回す）どこかで逢あいましょう。さ早く、どこで逢いましょう？　誰かくるといけません、早く言って……（情熱的に）その眼、その唇……一度だけキスさせて。……そのいい匂においのする髪の毛に、ちよつとキ

スするだけでいいんです……

エレーナ あたし誓って……

アーストロフ (先を言わずに) 誓うも何もあつたのですか。よけいな文句はいりません。……ああ、この腕、この手！ (両手に繰返し接吻する)

エレーナ さ、もう沢山、あんまりだわ……出て行ってちょうだい…… (両手を振放す) ひどいかた。

アーストロフ ね、どう、どうするんです、あしたどこで逢うんです？ (女の胸に手を回す) ね、そうでしょう、もうこうなったら否も応もない、どうしたって逢わずにやいられないんだ。(接吻する)

その時ワーニャが、薔薇の花束を持って登場、ドアのところで立ちどまる。

エレーナ (ワーニャに気づかず) ゆるして……放して頂戴…… (アーストロフの胸に頭を押しつける) いけませんったら！ (行こうとする)

アーストロフ (胸から手を放さず) あした森の番小屋へいらっしやい……二時ごろ。ね、

いいでしょう、きつと来ますね？

エレーナ (ワーニヤを見て) 放して！ (すっかり動顛どうてんして窓のほうへ身をすさらす)

ほんとにひどいわ。

ワーニヤ (花束を椅子いすの上に置き、興奮のていで、顔や襟えりくび首をハンカチで拭ふく) なんでもないさ。……なあに……なんでもないさ。

アーストロフ (ふてくされて) やあワーニヤ先生、なかなかいい天気だな、きょうは。

朝のうちはずづついて、一雨来そうな空あいだったが、今じや日が照っている。まったくもって、結構な秋になったもんだなあ……秋蒔まきもうまくいつてるし。(と図面を筒形に巻く) ただ、なんだね、日が短くなりはしたがね。……(退場)

エレーナ (いそいでワーニヤに近寄って) ね、後生だから力を貸してちようだい。あたしたち夫婦が今日すぐここを立てるように、あなたの威光でなんとか計らってちようだい！ いいこと？ 今日すぐですよ！

ワーニヤ (顔を拭きながら) ええ？ ふむ、そう……よろしい。……僕はね、エレーナ、すっかり見てしまった、すっかり……

エレーナ (いらだつて) ね、いいこと？ あたし、どうしても今日、ここを発たつんだか

ら！

セレブリヤコーフ、ソーニヤ、テレーギン、マリーナ登場。

テレーギン 閣下さま、わたくしもどうやら、からだの具合がはつきり致しませんです。

これでもう二日もふらふらしておりますので。なんですか頭つむりがその……

セレブリヤコーフ ほかの連中はどこだね？ わたしはこの家が気に入らんよ。まるで化物屋敷だ。だだっぴろい部屋が二十六もあってさ、すぐみんな散り散りばらばらになつてしまう。呼んだって搜したって、誰ひとり見つかったためしがない。(呼鈴を鳴らす)

大奥さんと若奥さんと呼んできなさい。

エレーナ あたし、ここにおります。

セレブリヤコーフ 皆さん、どうぞ席へついてください。

ソーニヤ (エレーナに近づき、もどかしそうに) あのかたなんておっしゃって？

エレーナ あとで。

ソーニヤ まあ、顫ふるえてらっしゃるのね？ 気をもんでらっしゃるのね？ (探るように)

相手の顔を見つめる）わかったわ。……あのかたもう、ここへは来ないって仰しやっただけでしょう……ね？（間）ね、そうでしょう？

エレーナうなづく。

セレブリヤコーフ（テレーギンに）からだの具合のわるいのは、なんとかまだ我慢のしようがあるが、この田舎の暮しぶりときた日にや、わたしにはまったく齒が立たんね。

わたしはなんだか、地球を踏みはずして、別の星の世界へ落っこちたみたいなのがすよ。どうぞ皆さん、席についてください。ソーニヤ！（ソーニヤは耳にはいらず、悲しそうにうなだれて佇たたくんでいる）ソーニヤ！（間）聞えない。（マリーナに）ばあや、お前もおかけ。（乳母、腰をおろして靴下を編む）ではどうぞ、皆さん、ひとつ皆さんのお耳を、注意の釘くぎによく引っかけた頂きましょう。（ひとり笑う）

ワーニヤ（いらいらして）たぶん、僕には用がないでしょうね？ 行ってもいいですか？

セレブリヤコーフ いいや、誰よりも君が大切な人なんだよ。

ワーニャ これはこれは、一体何を仰せつかるのかな？

セレブリヤコーフ 仰せつかる？……いや君は、何を怒っているのだね？ (間) もし何

か君の気に障ることを、わたしがしたのだったら、どうか赦してくれたまえ。

ワーニャ その物の言いつぶりをやめるんですな。さ、本論にはいりましょう。……どんな用なんです？

ヴォイニーツカヤ夫人登場。

セレブリヤコーフ あ、ちようど母も見えました。では皆さん、始めることにします。

(間) 諸君、ここに皆さんをお招きしたのは、ある重大な聞きこみを、皆さんにお伝えせんがためなんです。検察官がいよいよ乗りこんでくるらしいですぞ。いや、冗談はさておき、なかなか重大な問題なのです。こうして皆さんのお集まりを願ったのは、じつは皆さんの協力と助言を仰ぎたいからなのでして、平ぜいの皆さんのご厚誼に甘えて、わたしの期待は叶えて頂けるものと信じております。わたしは学問をする人間で、書物に埋もれているものですから、実生活のほうには、これまでずっと疎かったわけです。

そこでこの際、世情に通じておられる皆様の知恵を拝借せずには、とても切り抜けることができないので、ワーニヤ君をはじめ、そこにおられるテレギン君にも、またお母さん、あなたにも、どうか相談に乗って頂きたいのです。……その話というのは、ほかでもないが、何分にもわれわれは「マネット・オムネス・ウナ・ノックス」、つまりその、老少不定でありますし、ことにわたしはこのとおりの老人でもあり、病身でもあるしするので、この際自分の家族に関する範囲だけなりとも、財産方面の整理をしておくのが、もつとも時宜を得た処置であろうかと考える次第です。わたしの生涯はもう終つたも同然ですから、自分一個のことは考えもみませんが、わたしにはまだ若い家内もあれば、年頃の娘もあります。（間）この田舎で生活を続けてゆくことは、私にはとうていできません。われわれは田舎向きにできた人間ではないからです。かと言って、この地所からあがるだけの金で都会ぐらしをすることも、また同じく不可能です。仮に森の木を売り払うにしても、これは非常手段であつて、毎としその手を使うわけにはゆきません。それでわれわれは、多少とも一定した収入額を永年にわたって保証してくれるような方法を、なんとか見つけ出さなければならぬわけです。ついては、ふと次の方法を思いついたので、ひとつ皆さんのご審議をわずらわしたい。細かい点は抜きにして、大

づかみに説明することにしますが、まずこの地所は、平均して二分以上の利をあげてはいない。そこでわたしは、これを売り払うことを提案したい。その代金を有価証券へ振りかえれば、四分ないし五分の利をあげることができるわけだし、わたしの考えでは、何千かの余分の金も浮いてくるはずですよ。それがあれば、フィンランドあたりに、小ぢんまりした別荘も買えようというものです。

ワーニャ　ちよつと待った。……どうも僕は耳が悪くなったようだ。もう一ぺん言ってください。

セレブリャコーフ　代金を有価証券へ振りかえて、残った余分の金で、フィンランドに別荘を買おう、というのです。

ワーニャ　フィンランドのことじゃない。……何かまだほかのことが聞えたが。

セレブリャコーフ　この地所を売り払ったらどうか、と言っているのです。

ワーニャ　そ、それだ。この地所を売り払おうというんですね、よろしい、まったくすばらしい思いつきだ。そこで一体この僕に、年寄りの母や、またこのソーニャをかかえて、どこへ行けというんです？

セレブリャコーフ　そのことなら、いずれまた相談するでしょうじゃないか。そう一どき

に話はできない。

ワーニヤ　ちよつと待った。どうやら僕は、この年まで常識というものが、ひとつかけらもなかったらしいぞ。今の今まで僕は、愚か千万にも、この地所はソーニヤのものと思つていましたよ。この土地は亡なくなった父が、僕の妹の嫁入り支度に買ってやったものです。今の今まで僕は間抜けで、法律のトルコ式解釈というものを知らずにいたもので、この土地は妹からソーニヤに伝わったものとはかり思つていましたよ。

セレブリヤコフ　そりやいかにも、この地所はソーニヤのものさ。誰がそうでないと言つてゐる？　だからソーニヤの承諾がなければ、わたしだって無理に売ろうと言やしない。のみならず、わたしがこういう案を持ち出すのも、ソーニヤのためを思えばこそなんだ。

ワーニヤ　どうもおかしいぞ、愈いよいよ々もつてわからない！　僕の気がくるつたのか、それとも……それとも……

ヴオイニーツカヤ夫人　ジャン、アレクサンドルに逆らうんじやありません。まかせておおき。この人のほうが、私たちよりよつぽど、事の善よし悪あしをわきまえていなさるんだから。

ワーニャ いや、まあ水を一杯もらおう。(水を飲む) さあ言いたまえ、なんなりと遠慮なく、どしどし言いたまえ!

セレブリヤコフ どうもわからん、なぜ君はそう興奮するのかね? わたしだって何も、この目論見が理想的なものだなどと言いはしない。皆さんがいかにこののなら、あえて固執するつもりはないのだ。(間)

テレーギン (はらはらして) 御前さま、わたしは学問というものにや、ただ敬意を抱いているばかりじゃござんせんで、何かこう、親しみとでもいったような感じを抱いておりますので、はい。と申しますのも、わたくしの弟のグリゴリー・イリイチの家の兄は、もしやご存じかも存じませんが、コンスタンチン・トロフィーモヴィチ・ラケデモノフと申しまして、学士でございまして……

ワーニャ やめろ、ワツフル、大事な話の最中だ。……ま、いいから後あとにしろ……(セレブリヤコフに) ちょうどいい、ひとつこの男に訊きいてごらんなさい。この地所は、この男の叔父貴から買ったんだから。

セレブリヤコフ やれやれ、今さらそんなこと、聞いたところで始まるまい。面白くない。

ワーニャ この地所は、当時の金にして、九万五千ルーブリで買ったんだ。父はそのうち、七万しか払わずに死んだから、残る二万五千は借金になっちまった。さあ、ここんところを、よく聞いてくださいよ。……僕は大好きな妹のためを思って、この土地の相続権を放棄したんだ。さもなければ、この土地は結局、こうして内のものにはならなかったはずだ。いや、そればかりじゃない、僕はこの十年というもの、まるで牡牛おうしみたいに汗水たらして、その借金をきれいに済なしたんだ。

セレブリャコーフ しまったなあ、こんな話を持ち出さなけりやよかった。

ワーニャ この土地の借金がきれいに片づいて、おまけにちやんとここまで、無事に持つてこれたのは、ひとえにこの僕という人間一個の努力の賜物たまものなんだ。それを今さら、こんな年を取ってしまった僕の首根っこをつらまえて、表へ抛ほうり出そうというんだ！
 セレブリャコーフ 一体どうしたらいいと言うのかね。わたしにはさっぱりわからん！

ワーニャ この二十五年のあいだ、僕はこの土地の差配をして、汗水たらして、せつせと君に金を送ってやった。こんな真正直な番頭が、どこの世界にあるものか。だのにあんたは、その間じゆうありがとうの一言ひとことも、僕に言ったためしがないじゃないか。その間じゆう、若い頃も年とつた今も、僕はあるから、年額五百ルーブリ也なりの、乞食こじきも同

然の捨扶持すてぶちを、ありがたく頂戴ちやうだいしているにすぎないんだ。——しかもあんたは、ただのルーブリだつて、上げてやろうと言ったことがないんだ！

セレブリヤコーフ　ワーニャ君、それは無理難題というものだよ。わたしは実務にうとい人間だから、この辺のことは全然めくらなんだ。君は幾らでも好きだけど、どしどし上げてくれたらよかつたのだ。

ワーニャ　ああいつそ、思う存分くすねてやるんだつた。その、くすねることもできなかつた意気地のない僕を、皆さん、どうぞ思いつきり笑ってください。そうするのが本当だつたのだ。それをやれば、乞食の境涯に今さら身を落すこともなかつたのだ！

ヴオイニーツカヤ夫人（きびしく）これ、ジャン！

テレーギン（はらはらして）ねえワーニャ、およしよ。いい子だから、およしよ。……わたしや顫ふるえがついてきたよ。……永年のいつきあいを、今さらぶちこわすこともないじゃないか。（ワーニャに接吻せつぷんする）およしよ。

ワーニャ　二十五年というものは、この母親と顔つき合せて、まるでモグラモチみたいに、ろくろく表へも出ずに暮してきたのだ。……われわれの考えることも、われわれの感じることも——みんな残らず、あんたという一人の人間に寄つてかかっていたのだ。昼

は昼で、君の噂うわさをし、君の仕事のことを話題にし、君をわれわれの誇りとし、君の名を畏れ謹おそんで口くちにのぼせていたものだ。夜は夜で、君の雑誌だの本だのを読みふけて、

大事な時間をつぶしたものだ。——今じゃそんなもの、涙はなも引っかけやしないがね。

テレーギン およしよ、ワーニヤ、およしよ……。聞いちやいられないから。

セレブリヤコーフ (憤然として) わたしにはわからん、一体どうしろと言うのだから。

ワーニヤ 君はわれわれにとつて、世界で一番えらい人だった。君の書く論文は、端から暗記していたものだった。……だが、いまこそ目がさめたよ！ 何から何まで見透しさ

ね！ 芸術がどうしたのと書いちやいるが、君にや芸術のゲの字もわかっちゃいないんだ！

だ！ かつて僕が愛読した君の本なんか、びた一文の値うちもありやしなんだ！ わ

れわれは、まんまと一杯くわされたのだ！

セレブリヤコーフ 皆さん、この人をなんとかしてくださいませんか、いやなんともはや！

わたしは向うへ行こう！

エレーナ ワーニヤさん、いいからもうお黙りなさい！ わかつて？

ワーニヤ いいや黙らん！ (セレブリヤコーフの行く手に立ちふさがって) まだまだ、

話は済んじやいない！ 君は、僕の一生を台なしにしちまつたんだ！ この年まで僕は、

生活を味わったことがない、生活をね！ 君のおかげで僕は、一生涯でいちばんいい時代を、台なしに、すつてけてんにすつちまつたんだ！ 貴様は、おれの不倶ふぐたいしてん戴天の敵だ！

テレーギン 聞いちやいられない……聞いちやいられない。……あつちへ行こう……（身も世もあらぬていで退場）

セレブリヤコフ だから、どうしろと言うのかねえ？ それに全体、なんの因縁があつて、そんな言いがかりをつけるのだ？ ばかばかしい！ この地所が君のものなら、勝手に君のものにしたらいじやないか。わたしは別に欲しいとは言わん。

エレーナ あたし、もうこれつきり、こんな地獄は出て行くわ！（叫ぶ）もう我慢がならない。

ワーニャ 一生を棒に振つちまつたんだ。おれだつて、腕もあれば頭もある、男らしい人間なんだ。……もしおれがまともに暮してきたら、シヨーペンハウエルにも、ドストエーフスキイにも、なれたかもしれないんだ。……ちえつ、なにをくだらん！ ああ、気がちがいそうだ。……お母さん、僕はもう駄目です！ ねえ、お母さん！

ヴォイニーツカヤ夫人（きびしく）だから、アレクサンドルの言うことを聴くんです！

ソーニヤ　（乳母の前に膝ひざまずいて、しがみつく）ばあや！　ばあや！

ワーニヤ　お母さん！　僕はどうしたらいいんです？　よろしい、何も言わないでください！　どうしたらいいか、僕にはちやんとわかっている！　（セレブリヤコーフに）畜生、覚えてろよ。　（中央のドアから退場）

ヴォイニーツカヤ夫人、それに続く。

セレブリヤコーフ　諸君、これは一体どうしたことだ、ええ？　あの気ちがいを、どっかへ引っぱって行ってくれ！　とても一つ屋根の下じや暮していけない！　現にあすこに（と中央のドアをさして）とぐろを巻いているのだ。隣同士みたいなものなのだ。……どっか村のほうか、それとも離れのほうへでも、あの男を引っ越させてくれ。さもなければ、このわたしが出ていく。とてもあんな男と、いつしよに暮すことはできません。……エレーナ　（夫に）あたしたち、今日すぐここを発たちましようよ！　早速さっそくその支度をさせなければ。

セレブリヤコーフ　いやはや、呆あきれはてたやつだ！

ソーニャ　（膝まずいたまま、父のほうへ向きなおる。いらいらと涙声で）お父さま、情けというものを、お忘れにならないでね！　わたしもワーニャ伯父さんも、ほんとに不合せなんですもの！（みだれる心を押しとどめながら）情けというものを、お忘れにならないでね！　覚えてらっしゃるでしょう。あなたがまだ働き盛りでいらしたころ、ワーニャ伯父さんとお祖母^{ばあ}さまは、毎ばん夜おそくまで、あなたのために参考書を翻訳したり、原稿の清書をしたり、していらしたものですわ……毎晩々々！　わたしもワーニャ伯父さんも、息つくまもないほど働いて、一文の無駄づかいもしまいとびくびくして、みんなあなたにお送りして来ましたわ。……わたしたちの苦労も、察してくださいさなければ！　あら、こんなこと言うつもりじゃなかったのに、つい口がすべってしまつて。でもお父さま、わかつてくださるでしょう、わたしたちの気持。情けというものを、お忘れにならないでね。

エレーナ　（興奮して夫に）ねえ、アレクサンドル。どうぞお願い、あの人とうまく話をつけて。……後生ですから。

セレブリヤコフ　よしよし、なんとか話をつけてこよう。……わたしは何も、あの男を咎^{とが}めるんじゃない、腹をたてているわけでもない。だがね、まあ考えてもごらん、あの

男の言動は、なんとしても妙じやないかね。まあいいさ、ちよつと行ってこよう。（中央のドアから退場）

エレーナ なるべく穏やかに、あの人の気持を静めるようにね……（続いて退場）

ソーニヤ （乳母に抱きつきながら）ばあや！ ばあや！

マリーナ なんでもありませんよ、お嬢ちゃん。鶯がちょう鳥がガアガア言っただけ、——すぐ

やみますよ。……ガアガア言っただけ——すぐやみますよ。……

ソーニヤ ばあや！

マリーナ （ソーニヤの頭を撫なでる）まあ、がたがた顫えて、まるで霜のふる真冬みたい

！ ほんとにまあ、お可哀かわいそうに。でも神様は、悪いようにはなさいませんよ。……善ほ

提樹だいじゆの花のお茶か、イチゴの蜜みつのお酒を、ちよいとあがっているうちに、すぐ元どお

りになってしまいますよ。……心配するんじゃないやありません、いい子、いい子……（中央

のドアをキツと見すえて）おや、また鶯鳥がちょうが、騒ぎでしたよ。まあま、勝手にするがい

い！

舞台うらでピストルの音。続けさまにエレーナの悲鳴。ソーニヤおびえる。

マリーナ ふん、本当にいやなこと！

セレブリャコーフ (恐怖のあまりよろめきながら駆けこむ) とめてくれ！ あの男をとめてくれ！ 気がふれたのだ！

エレーナとワーニャ、戸口で争う。

エレーナ (ピストルをもぎとろうとして) およこしなさい！ およこしなさいってば！
ワーニャ 放して、エレーン！ 放せてば！ (振りもぎって、舞台へ走せ入り、きよろきよるとセレブリャコーフを捜す) どこだ、あいつは？ やつめ、そこにいるな！

(彼をめがけて撃つ) 見ろ！ (間) 駄目か？ また、しくじったか (憤然と) ええ、ちつ、畜生。(ピストルを床へ投げつけ、よろよろと椅子いすに坐りすわこむ)

セレブリャコーフ茫然。エレーナは壁にもたれて、半病人の有様。

エレーナ どこかへ連れて行って！ 連れて行って、いつそ殺してちょうだい。……とて

ももう、あたしここにはいられない、いられない！

ワーニャ (悲痛な声で) ああ、おれはどうしたんだ！ どうしたんだ！

ソーニャ (小声で) ばあや！ ばあや！

—幕—

第四幕

ワーニャの部屋。かれ自身の寢室であり、また地所の事務室でもある。窓への大テーブルに、数冊の出納簿やいろんな書類が載っている。事務机、戸棚とだな、台だい秤ばかりなど。ほかにアーストロフ用のやや小型なテーブル。その上に製図用具や絵具、そばに大きな紙挟み。椋むくどり鳥とりを入れた鳥籠かご。壁には、誰にも用のなさそうなアフリカの地図。レザー張りのばかなでつかい長椅子ながいす。左手に、奥の間へ通じるドア。右手に、玄関へ出るドア。右手のドアのところには、百姓たちがよごさないように、靴ふきマット。——秋の夕暮。静寂。

テレーギンとマリーナ、向い合せに腰かけ、靴下の毛糸を巻いている。

テレーギン 早くおしよ、ばあやさん。そろそろお別れに呼び出される時刻だよ。もう馬車を回すようになって、お声がかかったからね。

マリーナ（早く巻こうとしながら）あとちよつぴりだよ。

テレーギン ハリコフへ行きなさるんだとき。あすこで暮しなさるんだね。

マリーナ それがいいのさ。

テレーギン びつくらなすつたんだねえ。……エレーナさんは、「もう一刻だって、ここにはいられない……発^たちましょう、さあ発ちましょうよ。……とりあえずハリコフへ行つてみて、住めそうな様子だったら、荷物をとりに人をよこせばいいわ……」と、こうおつしやるんだ。だから、ほんの身の周り^{まわ}の物だけ持つて発ちなさるんだよ。まあ結局、ねえばあやさん、あのご夫婦はここじや暮せない随^{ずい}性^{しょう}だったんだね。そうした随性^{ずいしょう}だったんだね。……これも前世の約束ごとさ。

マリーナ それがいいのさ。さっきのあの騒ぎといたら——ピストルまで振回してさ。いい恥つさらしだよ。

テレーギン アイヴアゾーフスキイあたりに描かせたら、さぞいい嵐^{あらし}の絵^えができるだろうねえ。

マリーナ 二度とこの目で見たくないものさ。（間）これでまた、もどおりの暮しができるとさね。朝は八時前にお茶。十二時すぎにはお昼。暮がたには晩の食事。ばんじ

世間の人さまなみに……きちんきちんとやってゆけますよ。……（ため息をついて）わたしやもう久しいこと、お素^{そうめん}麵を食べないよ、情けないったらありやしない。

テレーギン まったくね、長く素麵を打たなかつたなあ。（間）長らくねえ。……けさもね、ばあやさん、わたしが村を歩いていると、あの店の亭主がうしろからね、「やあい、居^{いそろう}候！」って、はやすじやないか。つくづく、つらくなつたよ。

マリーナ ほつておおきよ、そんなやつ。わたしたちはみんな、神さまの居候^{すわ}じやないか。あんたも、ソーニャちゃんも、ワーニャさんも——誰一人として、安閑と坐^{すわ}っている者はないよ、みんなせつせと働いていなさるんだよ。誰も彼も。……ソーニャちゃんはどこにいなさる？

テレーギン 庭だよ。ドクトルと一緒に、ワーニャさんを捜しに歩いていなさるんだよ。

万が一、自殺でもされたら困るからねえ。

マリーナ ピストルはどうしたの。

テレーギン （ひそひそ声で）わたしが穴倉^{かく}へ匿^{かく}したよ。

マリーナ （薄笑いして）罪なこつた！

表からワーニヤとアーストロフがはいつてくる。

ワーニヤ ほつといてくれつたら。(マリーナとテレーギンに) あつちへ行つてくれ、せめて一時間でも、僕を一人で置いてくれよ。こう見張りつきじやまつたくやりきれん。

テレーギン すぐ行くよ、ワーニヤ。(爪つまさき立ちで退場)

マリーナ 鷺がちょう鳥が、ガア、ガア、ガア! (毛糸をまとめて退場)

ワーニヤ 君もかまわんでくれつたら。

アーストロフ それはこつちから頼みたいくらいだ。なにしろ僕は、もうとつくに家へ帰らなけりやならない人間なんだからね。ところが、最前から幾度も言うとおりに、君が取つたものを返してくれない限り、僕は帰るわけにはゆかないんだ。

ワーニヤ 何も取りやしないよ。

アーストロフ ばかもいいかげんにしたまえ——そう人をじらすもんじやないよ。僕は早く帰らなきやならないんだぜ。

ワーニヤ なんにも取りやしないつたら。

アーストロフ へえ、そうかい? じゃ、もうちよつとだけ待ってやろう。その上は、済

まないけれど、力づくで取返すから、そう思い給え。^{たま}君をふん縛って、それから捜すんだ。僕は本気で言ってるんだぜ。

ワーニャ どうなりと好きにするさ。(間) まったく、へまをやったものだなあ。二度も撃ちながら、一発もあたらないなんて！ われながら愛想がつきたよ。

アーストロフ そんなに撃ちたいんなら、いつそのこと、自分の眉間^{みけん}をぶち抜くがいいさ。ワーニャ (肩をすくめて) どうも変だよ。僕は人殺しをやりかけたのに、縛ろうとも訴

えようともする人がない。つまりは、僕を気が扱いにしているわけだな。(毒々しい笑い) この僕が気がいいで、その一方、大学教授だとか大学者だとかいうお面をかぶって、まんまと自分の鈍才ぶりやばかさかげんや、呆れ返った不人情^{あき}ぶりをごまかしているやつが、真人間だというのかい。わざわざ年寄りのところへ嫁に来て、人前で堂々と現在の亭主を裏切るような女が、真人間だというのかい。僕は見たぜ、ちゃんとこの眼で見たぜ、君があの子を抱いてるところをさ。

アーストロフ いかにも、そのとおり、抱きましたとも。ところが君は、ほら、これさ。

(鼻をつまんで見せる。——振られたという仕草)

ワーニャ (ドアを見ながら) へん、気がふれてるのはこの地球のほうさ、のめのめと君

たちを生かしとくなんてね。

アーストロフ　ちえつ、何をばかな。

ワーニヤ　まあ仕方がないさ——どうせ僕は気がいなんだから、責任を負う力もないし、どんなばかを言ったつていいわけだ。

アーストロフ　その手は古いよ。君は気がいどころか、つむじのまがった唐変木とうへんぼくだよ。

まったく、ふざけた男だよ。僕は前にや、唐変木というやつは、みんな常軌を逸した病人ばかりかと思つていたが、今日こんにちではもう、人間のノーマルな状態が、すなわち唐変木なんだと、そう意見を変更したね。君はまったくノーマルな男だよ。

ワーニヤ　(両手で顔をおおう) 恥ずかしい！ この僕の恥ずかしさが、君にわかつてもらえたらなあ！ 恥ずかしい、まったく恥ずかしい。(やるせない声で) ああ、たまらない！ (テーブルにうなだれる) 一体どうしたらいいんだ。どうしたら。

アーストロフ　まあ、仕方がないさ。

ワーニヤ　どうにかしてくれ！ ああ、やりきれん。……僕はもう四十七だ。仮に、六十まで生きるとすると、まだあと十三年ある。長いなあ！ その十三年を、僕はどう生きていけばいいんだ。どんなことをして、その日その日をうずめていったらいいんだ。ね

え、君……（ぐいと相手の手を握って）わかるかい、せめてこの余生を、何か今までと違ったやり口で、送れたらなあ。きれいに晴れわたった、しんとした朝、目がさめて、さあこれから新規蒔まきなお直しだ、過ぎたことはいっさい忘れた、煙みたいに消えてしまった、と思うことができたらなあ。（泣く）君、教えてくれ、一体どうしたら、新規蒔直しになるんだ。……どうしたらいいんだ。……

アーストロフ （腹だたしく）ちえつ、しようのない男だなあ。今さら新規蒔直しも何もあるものか。君にしたって僕にしたって、もうこれで、おしまいだよ。

ワーニャ やつぱりそうか。

アーストロフ ああ、断じてね。

ワーニャ そこを、なんとかしてくれ。……（胸をさして）ここが焼けつくようなんだ。

アーストロフ （癩かんしゃく癩しゃくまぎれにどなる）よせたら！ （言葉を柔らげて）そりゃ百

年二百年たったあとで、この世に生れてくる人たちは、みじめなわれわれが、こんなにかばかしい、こんなな味けない生涯を送ったことを、さだめし軽けい蔑べつするだろう。そして、なんとか仕合せにやっていく手を、見つけだすかもしれない。だが、われわれは結局……。いや、われわれにはお互い、たった一つだけ希望がある。その希望というの

は、われわれがお棺の中で目をつぶったとき、何か幻が、訪れてきてくれはしまいかということだ。それも、何かしら楽しい幻がね。(ため息をついて) まったくだよ、君。

この郡内で、しゃんとした、頭のある人間といったら、君と僕と、たった二人しきやいなかったものだ。ところがどうだ、この十年ほどの俗っぽい下劣な生活のおかげで、まんまとわれわれも、泥んこの中へ引きずり込まれてしまったじゃないか。その毒気に当てられて、僕たちは骨の髄まで腐つちまつたじゃないか。そしてお互い、世間なみの凡俗に成り下つちまつたじゃないか。(早口に) いや、しかし、こんなことじゃ誤魔かされんぞ。さ早く、あれを返したまえ。

ワーニャ 何も取りやしないというのに。

アーストロフ いいや君は、僕の薬箱のなかから、モルヒネの壘びんを取ったんだ。(間) いかね、君がもし、どうあつても自殺したいと言うのなら、森の中へ行つて、ずどんと一発やるがいいさ。だが、あのモルヒネだけは返してくれ。さもないと世間の口がうるさいからね。まるで僕がわざわざ君にやつたみたいに言われちゃ、かなわないからね。……僕はいずれ、君の死骸しがいの解剖をしなけりやなるまい、それだけでもう沢山だよ。……くそ面白くもない。

ソーニャ登場。

ワーニャ ほつといてくれつたら。

アーストロフ (ソーニャに) ねえソーニャさん。あなたの伯父さんは、僕の薬箱のなかからモルヒネを一壺ちよろまかしておきながら、どうしても返してくれないんですよ。言つて聞かしてください、ばかなまねも……いいかげんにしろつてね。だいいち僕は、こうしちゃいられないんです。早く帰らなくちゃ。

ソーニャ ワーニャ伯父さん、ほんとにお取りになつたの? (間)

アーストロフ 取つたんですよ。ちゃんとわかつてる。

ソーニャ お出しなさい。なぜそう、わたしたちをおどかしてばかりいらつしやるの?

(優しく) ね、お出しなさいね。ワーニャ伯父さん! そりやわたしだって、あなたに負けないくらい不合せかもしれないわ。けれども私は、やけになつたりはしません。じつところえて、しぜんに一生の終りがくるまで、がまんしとおすつもりですわ。……あなたも我慢なすつてね。(間) さ、出してちようだい! (伯父の両手にキスする)

ね伯父さん、お願い、いい子だから出してちょうだい！（泣く）伯父さんはいい人ね、あたしたちを、可哀かわいそうだと思つて出してちょうだい。我慢してね、伯父さん、我慢してね！

ワーニヤ（テーブルの抽斗ひきだしから壇を出して、アーストロフに渡す）さ、持っていきたまえ！（ソーニヤに）ところで、早く働こうじゃないか、一刻も早く、何か始めようじゃないか。さもないと、とてもこのままじゃ堪たまらない……とても駄目だ……

ソーニヤ ええ、ええ、働きましようね。お父さまたちが発たつていらしたら、さつそく仕事にかかりましようね。……（テーブルの上の書類を、いらだたく選えり分けながら）すつかり投げやりになっているわ。

アーストロフ（壇を薬箱に納め、革紐かわひもをしめる）さあ、これでやつと帰れると。

エレーナ（登場）まあワーニヤさん、ここにいらしたの？ わたしども、もう発ちますから、アレクサンドルのところへいらしてちょうだいな。何かお話があると言つてますわ。

ソーニヤ 行つてらつしやいね、ワーニヤ伯父さん。（ワーニヤの脇わきをかかえる）さ、行きましよう。お父さまと仲直りなさらなくちゃ駄目よ。ね、そうでしょう。

ソーニャとワーニャ退場。

エレーナ　じゃ、これでもう発ちますわ。（アーストロフに手を差しだす）ご機嫌よう。

アーストロフ　もうですか？

エレーナ　馬車の支度もできましたわ。

アーストロフ　さようなら。

エレーナ　さつき約束してくださいましたわね、もうここへはいらっしゃらないって。

アーストロフ　ええ、忘れやしません。（間）びつくりなすったですか？（女の手をと

る）そんなに怖こわかったですか？

エレーナ　ええ。

アーストロフ　いつそののまま、ここにおられたらどうです、ええ？　そしてあす、あの

森の番小屋で……

エレーナ　いいえ。……もう決りましたわ。……もう発つことに決ったからこそ、こうし

て大胆に、あなたのお顔を見ていられるのよ。……この上、たった一つのお願いは、こ

のあたしを、ちゃんと見直して頂きたいことだけ。あたし、変な女と思われていたくないの。

アーストロフ　ちえつ、しようのない人だ！（じれったそうな身ぶり）お願いだから、

このままここにいてください。いいですか、あなたはこの世で、何ひとつする仕事のな
い人だ。何ひとつ生きる目当てのない人だ。何ひとつ気のまぎれることのない人だ。だ
から晩おそかれ早かれ、所詮しよせんは情に負けてしまう人なんだ、——これは、ちゃんと決った
ことなんです。どうせそうなるからには、ハリコフだのクールスクだのという町よりか、
いつそのの、自然のふところにいだかれた土地のほうが、百倍も千倍も増しじやないで
すか。……すくなくも、そのほうが詩的だし、ずっと美しいじやないですか。……ここ
には森小屋もある、ツルゲーネフ好みの崩れかかった地主屋敷もある。……

エレーナ　おかしなカタねえ、あなたも。……聞けば聞くほど腹がたつわ。……でもあた
し……きつとあなたのことは、嬉しい思うれい出になると思うの。あなたは面白い風変りな
かただわ。もうこの先、二度とお目にかかることはないでしょう。だから——だから思
いきつて言いますけれど、あたし、いささか、あなたにぼうつとなつたくらいよ。さ、
仲よく握手をして、それでお別れにしましょうね。悪く思いつこなし。

アーストロフ（手を握つて）ええ、お発ちなさいとも。……（物思わしげに）まったくあなたという人は、根が実直な、いい人のようじゃあるけれど、そのくせなんだかこう、不思議なところのある人だなあ。現に、あなたがご亭主といっしょにここへ見えると、それまでせつせと働いて、その辺をごそごそやって、何かこう仕事らしいことをしていた連中が、^{たちま}忽ちみんな仕事をうちやらかして、まるひと夏というもの、ご主人の痛風だの、あなたのことだので、無我夢中になつてしまふんだからなあ。あなたがた夫婦のぐうたらな暮しぶりが、みんなにうつちまつたんだからなあ。僕はすつかりのぼせあがつて、まる一ト月というもの、何ひとつやらなかつた。そのあいだに、病人は、うじやうじや出てくる。僕の森や苗木の林じや、百姓が牛や馬を放し飼いにする。……まあ、こんな具合に、あなたがた夫婦という人は、どこへ行つても、その暮しをめちやめちやにするんですねえ。……いや、もちろんこれは冗談。だが、しかし、……どうも不思議だなあ。もしこの上、あなたがたがここに居坐つていたら、それこそ何もかも、ごっそり行かれてしまうことでしょうねえ。僕の身も破滅だろうし、あなただつても、どうせろくなことはないでしょうよ。さ、さつさとお発ちなさい。もう芝居は沢山！

エレーナ（アーストロフのテーブルから鉛筆を取りあげ、すばやく胸にかくす）この鉛

筆、記念に頂いとくわ。

アーストロフ どうも不思議だ。……せつかくこうして知り合いになったものが、いち夜明ければもう……二度と会うこともない赤の他人だなんて。これが人生というものかもしれない。……誰もいないうちに、またワーニヤ伯父さんが花束をかかえてはいつてこないうちに、お願いですから一ぺんだけ……キスをさせてください。……お別れのしるしに……いいでしょう？（女の頬にキスする）ああ、これで……もういい。

エレーナ ご機嫌よう。（あたりを見回して）ええ、構やしない、一生に一度だわ！

（いきなり男を抱きしめる。途端にさつと離れる）もう行かなくては。

アーストロフ 早く発ってください。馬車の用意ができたのなら、さあ早く発ってください。
い。

エレーナ 誰かこっちへ来るわ。（兩人、聴き耳をたてる）

アーストロフ これでおしまい！

セレブリヤコフ、ワーニヤ、本を手にしたヴォイニーツカヤ夫人、テレーギン、
ソーニヤ登場。

セレブリヤコーフ（ワーニャに）古いことをかれこれ言いだすやつは、目がつぶれてしまうがいいんだ。あの騒動があつてこのかた、ほんの四、五時間のあいだに、わたしはつくづく悟るところがあつた。しみじみ考え直すところがあつた。人間いかに生くべきかということについて、後世への遺訓ともなるべき一大論文だつて、書こうと思えば書けるぐらいだ。わたしは喜んで君の詫び言葉を受入れます。と同時に、こちらからも厚くお詫びを申述べたい。ではご機嫌よう！（ワーニャに三度接吻する）

ワーニャ この先も月々の仕送りは、ちゃんと今までどおりにしますよ。何もかも水に流してね。

エレーナ、ソーニャを抱きしめる。

セレブリヤコーフ（ヴォイニーツカヤ夫人の手に接吻する）では、お母さん……

ヴォイニーツカヤ夫人（接吻を返して）アレクサンドル、また写真をとつて、送ってくださいよ。わたしの気持は、よくご存じのはずだね。

テレーギン では御前さま、ご機嫌よろしゅう。どうぞ、わたくしどもをお忘れなく！
 セレブリヤコーフ （ソーニヤに接吻して）さようなら。……皆さん、ご機嫌よう！

（アーストロフに手を差しのべて）楽しくご交際を頂いてありがとう。……わたしはもとより、あなたの物の考えようや、あなたの熱心や感激性を、大いに尊重します。だが一つだけ、この年に免じて、お別れのしるしに、一言忠告をゆるして頂きたい。皆さん、仕事をしなければいけませんぞ！ 仕事をしなければ！ （一同に頭を下げる）ではご機嫌よう！（退場）

ヴォイニーツカヤ夫人とソーニヤ、その後にしたがう。

ワーニヤ （エレーナの手にひしと接吻して）さようなら。……赦ゆるしてください。……二度とお目にかかる時はありますまい。

エレーナ （涙ぐんで）さよなら、ワーニヤさん。（ワーニヤの髪に接吻して退場）

アーストロフ （テレーギンに）ねえワツフル、おもてへ行つて、ついでに僕の馬車も、回してくれるように言つてくれないか。

テレーギン ああ、いいともさ。(退場)

アーストロフとワーニャの二人だけ残る。

アーストロフ (テーブルの上の絵具を片づけて、トランクの中にしまう) どうして見送りに出ないんだね？

ワーニャ このまま発つて行くがいいのさ。とても僕には……いや駄目だ。つらいんだよ。さ、一刻も早く何かしなくちや。……仕事だ、仕事だ！ (テーブルの上の書類を引っかきまわす)

間。馬車の鈴の音。

アーストロフ 行つてしまった。教授閣下、さぞ嬉しいこつたろう。もう二度とふたたび、ここへは足踏みもしないだろうて。

マリーナ (登場) お発ちになりましたよ。(肘かけ椅子にかけて、靴下を編む)

ソーニヤ (登場) お発ちになつてよ。(目を拭く) 道中ご無事でね。(伯父に) さあ、
 ワーニヤ伯父さん、仕事をはじめましょうね。

ワーニヤ そう、仕事だ、仕事だ。……

ソーニヤ もうずいぶん永いこと、ご一緒にこのテーブルに坐らなかつたことねえ、ずい
 ぶん永いこと。(テーブルの上のランプに火を入れる) あら、インキがないらしい。…
 … (インキ壺を取つて戸棚の前へ行き、インキを入れる) なんだか淋しいわ、こうして
 お発ちになつてしまうと。

ヴォイニーツカヤ夫人 (そろそろと登場) 行つてしまった! (腰をおろして読みふけ
 る)

ソーニヤ (テーブルに向つて腰かけ、帳簿をめくる) じゃあ、ワーニヤ伯父さん、勘定
 書から始めましょうね。すっかり、ほつたらかしくなつてゐるわ。今日も勘定書を取りに
 来た人があるのよ。じゃ書いてくださいね。あなたはそっち、わたしはこつちを書くわ。
 ……

ワーニヤ (書く) 「一つ……ええと……」

兩人無言のままペンを走らす。

マリーナ（あくびをして）ああ、ねむ睡いこと。……

アーストロフ 静かだなあ。ペンのきしる音と、コオロギの啼なきごえがするだけだ。ほかほかして、いい気持だ。……なんだか帰っていく気がしないなあ。（馬車の鈴の音）いや、馬車が来た。……仕方がない。じゃ皆さん、ご機嫌よう。ついでに私の机もご機嫌よう。——あとは、夜道をすつ飛ばすだけです。（ぼや函面を紙挟みに納める）

マリーナ 何もそう、あわてなさらなくても。まあ、ごゆるりとなさいませよ。

アーストロフ そうはいかないんだ。

ワーニャ（書きながら）ええと、未払金の残額、二ルーブリ七十五なり也と……

下男登場。

下男 アーストロフ先生、馬車の用意ができやした。

アーストロフ わかったよ。（薬箱、トランク、紙挟みを下男に渡す）じゃ、これを頼む。

紙挟みをつぶさんでくれよ。

下男 へえ。(退場)

アーストロフ じゃ、これで……(と、別れを告げに進む)

ソーニャ この次は、いつお目にかかれて？

アーストロフ まあ、来年の夏でしょうな。この冬は、まずもって見込みがなさそうです。

……もつとも、何かあつたらお知らせ願いますよ——即刻、駆けつけますからね。(握手する) いろいろとおもてなしを頂いたり、親切にして頂いたり……お礼の申上げようもありません。(乳母のそばへ行き、その髪に接吻する) ご機嫌よう、ばあやさん。

マリーナ まあまあ、お茶もあがらずにお発ちですか？

アーストロフ いや、いいんだよ、ばあや。

マリーナ では、ウオトカでも一つ。

アーストロフ (決しかねて) そうさなあ。……

マリーナ退場。

アーストロフ（間をおいて）僕の馬車のね、副え馬のやつが、どうやらびっこを引いて
いるんだ。きのう、うちの馭ぎよ者しやが、水を飲ませに連れて行く時から、気がついていた
んだがね。

ワーニャ 蹄鉄ていてつを打ち直すんだね。

アーストロフ ロジエストヴエンノエ村で、鍛冶屋かじやに寄って行かなくちやなるまい。ま
あ仕方がない。（アフリカ地図の前へ行つて眺める）今ごろはこのアフリカじゃ、さだ
めて焼けつくような暑さなんだろうな——まったくかなわんなあ！

ワーニャ ああ、そうだろう。

マリーナ（ウオトカの杯とパンを一きれ載せた盆をささげて戻ってくる）さあさ、めし
あがれ。

アーストロフ、ウオトカを飲む。

マリーナ どうぞご息災だんなでね、旦那。（低く辞儀をする）パンもちつとめしあがったら。
アーストロフ いいや、もう沢山。……では皆さん、ご機嫌よう。（マリーナに）送って

こないでもいいよ、ばあやさん。いいんだよ。(退場)

ソーニヤ 蠟燭ろうそくをもつて見送つてゆく。乳母は肘掛椅子ひしかけいすに腰をおろす。

ワーニヤ (書く) ええと、二月二日、精進油しょうじんゆ二貫五百目。……二月十六日、またも精進油二貫五百目。……それから碾割ひきわりソバがと……(間)

馬車の鈴。

マリーナ あ、お発たちだ。

間。

ソーニヤ (戻つてきて、蠟燭をテーブルに立てて) お発ちになつたわ。……
ワーニヤ (算盤そろばんをはじいて書きつける) ええと、締めて……八十五ルーブリと……二

十五コペイカ也……

ソーニャも腰かけて書く。

マリーナ（あくびをする）ああ、神さま、どうぞお赦しを……

テレーギン、つまさき立ちで登場。ドアの横に腰をおろして、そつとギターの調子を合せる。

ワーニャ（ソーニャの髪の毛を撫なでながら）ソーニャ、わたしはつらい。わたしのこのつらさがわかってくれたらなあ！

ソーニャ　でも、仕方がないわ、生きていかなければ！（間）ね、ワーニャ伯父さん、生きていきましようよ。長い、はてしないその日その日を、いつ明けるとも知れない夜また夜を、じつと生き通していきましようね。運命がわたしたちにくだす試みを、辛抱ぶよく、じつところえて行きましようね。今のうちも、やがて年をとってからも、片時

も休まずに、人のために働きましようね。そして、やがてその時が来たら、素直に死んで行きましようね。あの世へ行ったら、どんなに私たちが苦しかったか、どんなに涙を流したか、どんなにつらい一生を送って来たか、それを残らず申上げましようね。すると神さまは、まあ気の毒に、と思ってくくださる。その時こそ伯父さん、ねえ伯父さん、あなたにも私にも、明るい、すばらしい、なんとも言えない生活がひらけて、まあ嬉し^{うれ}い！ と、思わず声をあげるのよ。そして現在の不仕合せな暮しを、なつかしく、ほほえましく振返って、私たち——ほっと息がつけるんだわ。わたし、ほんとにそう思うの、伯父さん。心底から、燃えるように、焼けつくように、私そう思うの。……（伯父の前に膝をついて頭を相手の両手にあずけながら、精根つきた声で）ほっと息がつけるんだわ！

テレーギン、忍び音にギターを弾く。

ソーニャ ほっと息がつけるんだわ！ その時、わたしたちの耳には、神さまの御使^{みつかい}たちの声がひびいて、空一面きらきらしたダイヤモンドでいっぱいになる。そして私たち

の見ている前で、この世の中の悪いものがみんな、私たちの悩みも、苦しみも、残らずみんな——世界じゆうに満ちひろがる神さまの大きなお慈悲のなかに、呑みこまれてしまふの。そこでやっと、私たちの生活は、まるでお母さまがやさしく撫でてくださるような、静かな、うつとりするような、ほんとに楽しいものになるのだわ。私そう思うの、どうしてもそう思うの。……（ハンカチで伯父の涙を拭いてやる）お気の毒なワーニャ伯父さん、いけないわ、泣いてらっしやるのね。……（涙声で）あなたは一生涯、嬉しいことも楽しいことも、ついぞ知らずにいらしたのねえ。でも、もう少しよ、ワーニャ伯父さん、もう暫くの辛抱よ。……やがて、息がつけるんだわ。……（伯父を抱く）ほっと息がつけるんだわ！

夜番の拍子木の音。——テレエギン、忍び音に弾いている。ヴォイニツカヤ夫人は、パンフレットの余白に何やら書きこんでいる。マリーナは靴下を編んでいる。

ソーニャ ほっと息がつけるんだわ。

青空文庫情報

底本：「かもめ・ワーニヤ伯父さん」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年9月25日発行

2004（平成16）年11月25日46刷改版

入力：米田

校正：阿部哲也

2010年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ワーニャ伯父さん

ДЯДЯ ВАНЯ

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ——田園生活の情景 四幕——

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>